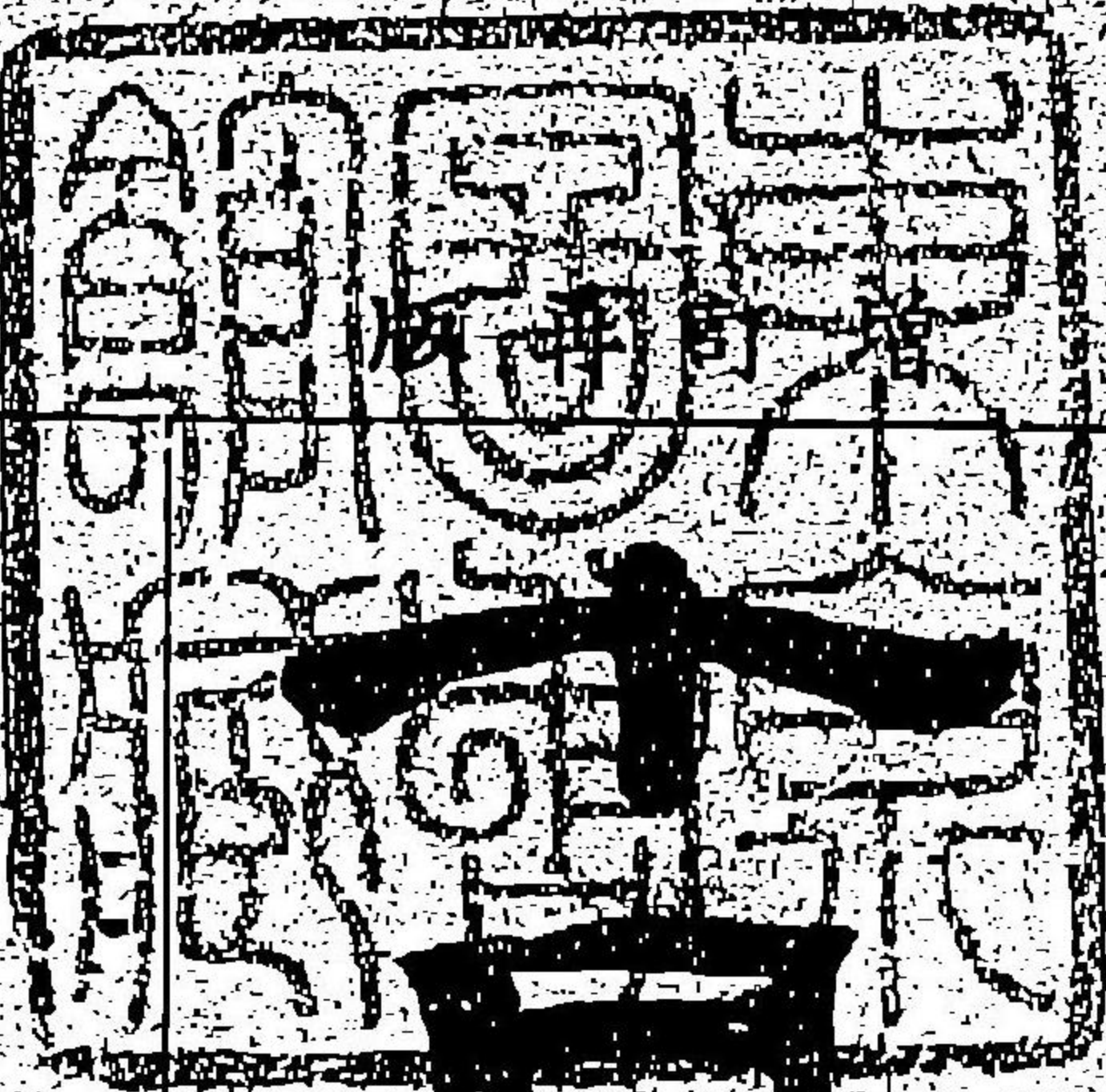


24  
102  
01

自唐以来

特20  
289

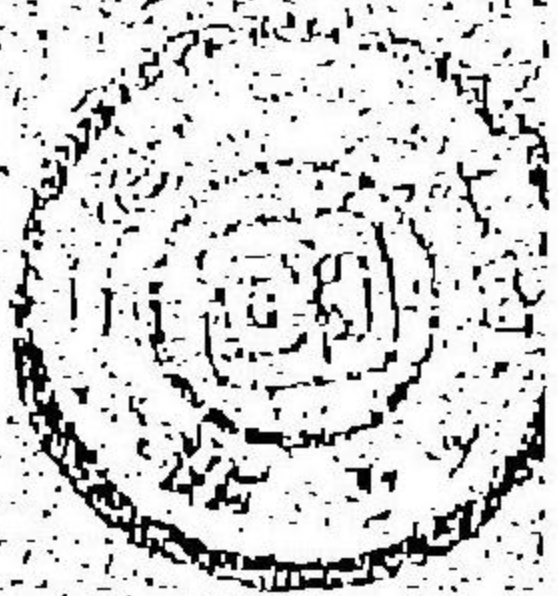


研堂散史著

古今世果(周)

東京

學齡館



十日間世界一周

再版についての緒言

學齡館主、ニコく然として來り曰く、「世界一周の校  
訂は、また脱稿に相成らずや再版は、何時着手するかす  
るか、と、毎日五本十本の催促状、それに、府内書林の小僧  
ども、再版のできぬうちは、度々あるくも無駄なれば、幾  
日間でも歸らずに、はきもの脱いでお待申し、御本を頂  
戴した上に戻りませう、なんと、胡多まいて、内外の言  
譯に困じ果てたれば、只今も、小僧二三人にたぬけ、裏  
門より参ッた次第、先生いかに。と問ひつめられ、散史は、  
暗打されたる心地して、「いつかの話に、再版せよ、

はありたれども、散史の身體と事異り、本には翼あらざれば、マサカそんなに賣れ切れとは、自らも思ひ付かず、ほんに一時の冗談と聞き流したが大失策、また一枚も朱を入れぬと、平氣の平で答ふれば、館主も怒るに怒られず、『初版にまさる大景氣五千や一萬は、其日の中に、ドシ〜』飛ぶと受合なるに、何で御棄て玉ふにや、如何なる事があるにもせよ、校訂丈けひとり忙ぎ、數千の客の鶴の頸、早々縮めさせ玉へと、一直線の掛合に、散史は遁るゝ辞なく、『今度は屹度うけ合つた遅れと言われ、けわれが爲る君は心配と玉ふなと、堅い約束に打首肯き、成るべく早くの一言に、又ニコ〜』として去りたれ

は、さすがに懶惰の我ながら、重て欺くべき様もなく、机上の雜務おしのけて、徹頭徹尾假名をつけ、さし悉と材料を増し加へ、再三再四改削めて、耕文社へと廻したるが、再版についての緒言なりと、明治二十三年天長節の前日、濱町の獨棲廬に於て、研堂散史とるす。

例言

一本書の材料は「ポストン、ジャーナル、サフラン、コンスタブル」の商業日報と題する新紙に記載せる大物づくしを基とし、其の他、本邦二三新聞紙の報ずる所を以て、補足せる者なり。

一本書の記事は、分り易きを主とし、或は問答の間に述べ、或は大物の口を藉りて述べ、もとより一定の例に倣はず。看者幸に、文辭の卑陋を咎むるとなく、其の精神のある所を取られ、悉く小説なりと見なすと勿れ。

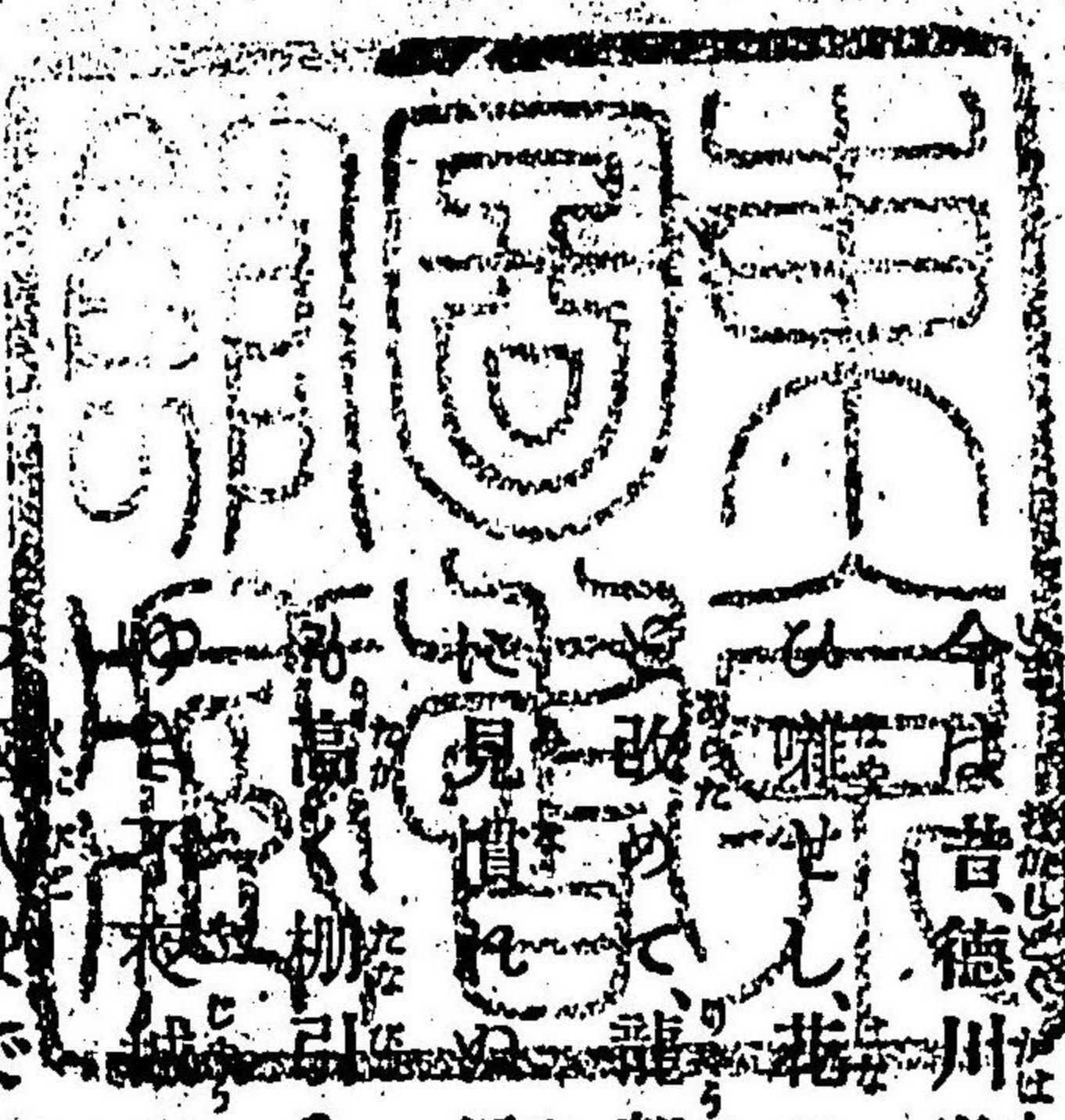
一本書の數量中にて、悉く我が數目に改算せざる者あるは、大に端數を生じ、誦讀に不便なればなり。若し左の表に準じて改算するときは、全數を知ると容易なり。但、呎は、大差なき故に、直に一尺に改算せり。故に、一丈といひ一尺といふは、一〇〇五八なりと知るべし。

- 一メートルは、三尺二寸九分餘。
- 一ヤードは、三尺〇一分七厘。
- 一呎は、一尺〇〇五厘八毛。
- 一吋は、八分三厘八毛。
- 一哩は、十四町四十三間一尺三寸餘。
- 一噸は、二百七十貫九百四十七匁。
- 一磅は、百二十匁九分六厘。
- 一法は、十九錢三厘。
- 一エーナルは、四反十八步。

明治廿二年六月、  
著者識す。

十日間世界一周。

東京 研堂散史戲著。



發端。

昔徳川將軍家の御威勢盛んなりし頃、土地一升到黄金一升と稱  
 されし。花の錦のお江戸の城も、明治御一新の此のかたは、名を東京  
 改めて、驛を茲に駐められ、日毎に變る其状態、昔びるきの禿天窗  
 に見慣れた馬車や人力車、空に網なす電氣線、煉瓦の屋根に烟突の烟  
 霧、柳引きて、花の霞とうつろはひ、曇らぬ御代の電氣燈、遠くまは  
 り、光るめぐみにうるははんと、五畿七道は言ふも愚か外  
 づ國人まで入り來り、日に増し月に殖え盛り、昔にまさる新江戸の花  
 も實もある賑ひは、實に日本國の王城の眞の威光と申すべけれ……  
 只今よみ上げましたるは、不思議にも私と同名の研堂散史とやらいふ

人が十日間に世界を一周りした日記を種にして作った『十日間世界一周』といふ本の始めにあつた一節でございますが、一体此の人の、どんな人ですか、傳記も書いて無いから、確とは分りませんが、其遊歴の本をよく見ますると、何れ東京に住んで居た、有名な大學者か、中端のはした學者か、無名のデモ先生かの様に思はれます(聴衆ノー) 兎も角も、其人の貫目を秤ることは、餘り肝要でもありませんから、詮鑿は廢にして、其日記の材料を吟味しまするに、實際正札附の事柄を書いたに相違無いと、散史が——證券印紙を貼つたかどうか知らないが——堅く保證するといふとですから、中々、是れ迄世上に有りふれた、小説とは違つて、皆さんの智慧袋を肥やすには、屈竟の種と存じまして、今日から、此の續き物をお話しする積りでございます。その隅に居たのは、花チヤンビヤありませんか。今からゐねむりですか。お話しが濟むと、お菓子と上げ丹から、辛抱して聞いておいでなさい。

最前も申上る通り、十日間の世界見物ですから、丁度十日間にお話しが濟むと、都合のよいわけでございますけれども、其遊歴の起りを少し申上げませんと、不分の廉も出來ますゆゑ、今日は、其起りだけをお話し致しませう。

明治二十二年一月一日ださうですが、散史の友達中には、近縣へ旅行したの、温泉へ往つたの、偽風邪だのといふ廣告を出して、年賀のお断りをした人も無つたもんですから、彼處是處の友達の家へ、早天から年始に出駆けました。一体、散史は常々酒は大嫌ひで、『酒は生命を取る毒水だ』とか、『金錢と時間を浪費する魔物だ』とかいッてる下戸ですから、日も又高い中に年始の禮も終へ、宅に歸つて『やれ〜元旦も目出度濟んだ』といふと、さに、不圖心附いたのが例の砂でございます。シヤシヤ〜する身体の塵

です。御承知の通り、火事と喧嘩と大風は、昔からお江戸の名物となつて居ました。が、御一新此のかた、火事と喧嘩とは、警察法の行き届く所から、其孫を見るときも出来ない様になりました。が、風の神の袋ばかりは、刑法やなんかで、取締るとは出来ないもんと見えて、相變らず荒れ廻つて居ます。ですから、ナンボ散水會社が有つて、水を散いて呉れても、黄塵萬丈といふ勢で吹き散らし、市中を通る目明は盲目になりたく思ひ、振袖着た女子衆は脛の露はれるを嫌がツて、洋服着たく思ひ、久米仙人でも、目を閉ぢて通るから、決して仙術を失ふ氣遣はない。——悪口をいへば——塵の都です。から、散史の着物も、身体も塵だらけに穢れたのでせう。そこで、散史が湯浴と出かけました。が、途中で氣が付いて、いや／＼今夜は湯屋もお休、どうせ出た序、袂に二三錢の小錢があるが、『三日は煨芋の釜も冷たいから、露店を素見さう』といふ考へで、ぶら／＼通りへ出かけました。

實に東京には、衛生家が澤山居るゆゑか、消光漢が多く有る故かは知れませんが、用向もないのに、運動とか散歩とかいッて、下駄の齒をすッぺらして居る者が澤山です。それに、屠蘇さげんの千鳥足連中が、佃煮にするほど澤山です。から、元日の晩でも、萬燈の光りは照り輝いて、露店も可なり繁昌して居ます。散史は、五月蠅と思ひ乍らも、群集の人を押分掻分進むうち、商賈替につよりどり一冊金貳錢と書た、木札を立てた古本店に引かゝりました。先づランプの風上に立ッて、本の標題を見て居ましたが、大抵は三號雑誌の端物計りで、此れぞといふ本もありませんが、其の中に、綴系も切れ／＼になり、表紙も満足にない古本が見付かったから、手に取ッて見ると、『十日翁』と書いてあります。奇らしい名でもあるゆゑ、後先を見まわしても、誰の著したものか、何時の板行かも分りませんが、十日間世界一周の秘傳といふ事を書いたもので、餘程面白さうですから、早速買取ッて



歸りました。段々讀んで見ると、つまるところは斯んな譯でございます。  
 世界を一周して、珍らしい物を見たり聞たりするのは、誰も好きな事  
 じゃが、非常の入費が掛るから、夫れは六ヶしい人民から絞り溜めた金で  
 往たのでは、後生が恐い。外國船のボーイと爲つたのでは、ノルマントン  
 號の様な事が恐い。そして又、世界を一周するのは、極珍らしい所だ  
 け、拾って歩たので間に合ふから、一年二年を費すには及ばない。予の指  
 圖通りにすれば、十日間で緩々と五十ヶ所は、見物できる。此五十ヶ所  
 を見物すれば、どんな自慢話しが始まっても、決して負けは仕まい。又此  
 の五十ヶ所も、予一人の了簡などで撰んだのではなく、皆最も名高い  
 物計りを、西洋の新聞雑誌等から集めたのじゃ。中には耳に聞き慣れ  
 たのもあるが、又耳新しいのも澤山ある。僅か十錢の旅費で、最も氣樂  
 に、最も細かに最も聊の時間で、世界を一周する仕方は、予の仕方であ



る。若し満足に一周した者には、金十萬圓の褒美を呉れる。一日たりとも延びたものは、金十錢の科料を言ひ付ける。

とあります。餘り甘い話ですから、散史も直に符まり込んで、繰返し々々讀直しました。が、其中に、一時も早く出立したくなって来て、とうとう其翌日、即ち一月二日早天に旅立と決心しました。明朝の出立ですから、其の晩の中に、兼て買つて置いた、米國人發明の飛行機を出して、能く改め、又其上に、すばらしい輕氣球を縫ひ付けて、飛ぶ助けにし、旅中に入用の、鉛筆、手帖、簡便寫真器械、大小ナイフ、マツタ、煙草、革製尺度、時計、磁石、望遠鏡、地圖、十日翁など、すっかり取揃ひ、勇み切つて上野の鐘の十二時を告ぐる頃、寢床に這入りました。明日は世界稀なる旅立の日で、色々の奇談もあります。から、早くから御出の程を待ち上ります。又御参考のため、十日翁の案内する、重なる個所を御披露いたせば、次の通りでございます。

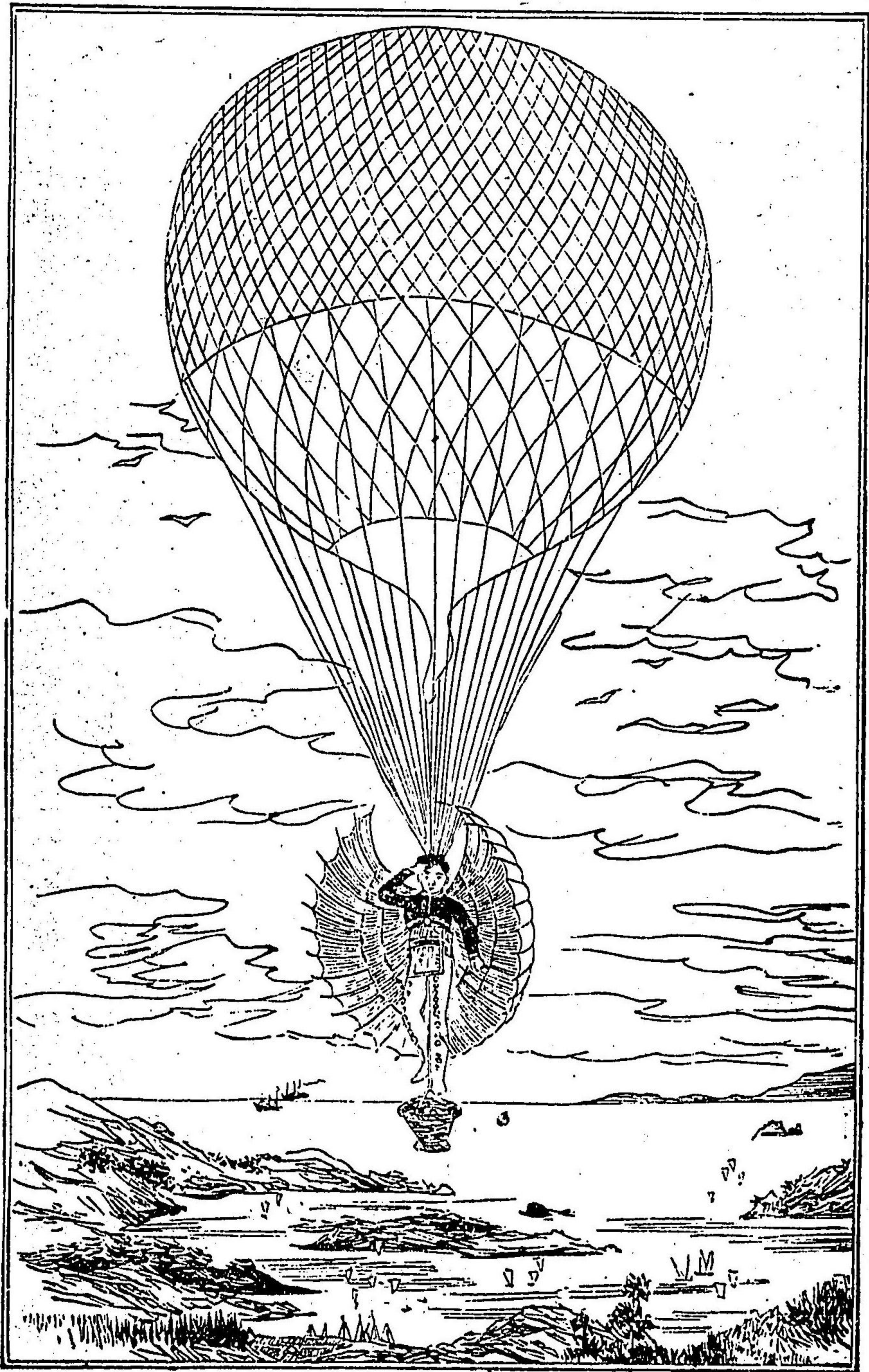
- |            |             |
|------------|-------------|
| 世界第一の長城。   | 世界第一の舊國。    |
| 世界第一の奇樹。   | 世界第一の山脈附高峰。 |
| 世界第一の毒獸地。  | 世界第一の長針金。   |
| 世界第一の鹹湖。   | 世界第一の大鐘。    |
| 世界第一の長隧道。  | 世界第一の古新聞。   |
| 世界第一の大新聞。  | 世界第一の奇時計。   |
| 世界第一の快甲鐵艦。 | 世界第一の深井。    |
| 世界第一の公園。   | 世界第一の大帝國。   |
| 世界第一の大都市。  | 世界第一の大砲。    |
| 世界第一の大學校。  | 世界第一の墨汁商。   |
| 世界第一の大書籍館。 | 世界第一の大演劇場。  |
| 世界第一の美婦人。  | 世界第一の大尖塔。   |
| 世界第一の高碑。   | 世界第一の大沙漠。   |

- 世界第一の大像。
- 世界第一の美山。
- 世界第一の美建築。
- 世界第一の大博覽會。
- 世界第一の過激家。
- 世界第一の多額懸賞金。
- 世界第一の大瀑布。
- 世界第一の大机。
- 世界第一の長掛橋。
- 世界第一の愉快地。
- 世界第一の大洞穴。
- 世界第一の大男。
- 世界第一の美天子。
- 世界第一の美旗。
- 世界第一の高塔。
- 世界第一の長鬚。
- 世界第一の大工場。
- 世界第一の要害地。
- 世界第一の大淡水湖。
- 世界第一の古林檎。
- 世界第一の大金持。
- 世界第一の大力持。
- 世界第一の多數出版書。
- 世界第一の肥婦。

- 世界第一の旅人宿。
- 世界第一の大耕地。
- 世界第一の小國。
- 世界第一の金満美人。
- 世界第一の大河。
- 世界第一の壯烈なる噴火山。
- 世界第一の直線。
- 世界第一の原木。

第一日。

昨日其のはじめをお話し申した研堂散史の出立も、いよ今日と相成りましたが、元來真直に周りましたも、二萬五千哩もある地球の所々を見物し乍ら、十日間に周ると云のですから、尋常の汽船や汽車では逆も間に合ひませぬ。處が散史の兼て買つて置いた飛ぶ機械は、此處に圖面でお目に掛ます通りの形で、蝙蝠の翅の様な者を、身體に付たのでございます。素的に早く飛たい時の用意に、其の上へ風船の工夫をいたしましたは、散史の考ひださうです。



明れば一月二日の早天となりましたが、散史は夙く起き出で、身仕度や携へて往くべき諸道具の始末をつけ、跡の事は萬端餘りなく執事にいひ付け、午前第五時の鐘聲と同時に飛び出す用意を整へました。此時は、家内一同は言ふ迄もなく、近所の友人は、皆集り来て見送りました。が、皆々の話に「昔は馬か船で往く人を送ると多かつたが、近來は瀛車や瀛船の見送りが多く、今日どなつては空に昇る人を見送るので、此後、人間が往かないでも、名所古跡などが周つて来る様になつて、名所古跡を見送るとなるかも知れん。」とあつたさうです。

さて、散史は五時の聲を聞くと、『お去らば』の一言を残して昇り始めました。が、少し風のあつたにも構はず、花火の玉の様に、真直に昇つて僅か十五分ばかりの中に、見えない程小さくなり、直ぐ見失せましたが、散史は一里餘の中天にありまして、段々西の方へ杣を取り、何時しか日本海を超

え、支那の領内に着きましたので、先づ第一番に、世界第一の長城を尋ねました。此長城は、一寸見た所では、日本の土塼の屋根を除いたものを、幾百倍大きく作つた形に似て居まして、色は黒く、眼はありませんが、身体は非常に長く、山や川の高い所低い所に付いて、うね／＼と蛇の様に伸びて居り、一重の所も、二重三重の所もありません。そこで、散史は近づいて、委しいとを問ひ掛けた所が、真面目な答でございます。

某、姓は煉瓦、名ハ疊々、字ハ干城、軀軀長大ノ故ヲ以テ、世人呼テ萬里之長城ト云フ。地ハ北京ノ北方ニ在リテ、東西ニ亘ル。匈奴ノ侵入ヲ防ガシ、シテ東ハ遼東ノ海濱ヨリ、西ハ函谷關ニ至ルマデ、山谷ヲ横斷シ、長サ凡ソ五百十餘里。日本本洲ノ長サヨリ大ナリ。高サ二丈二尺、基礎ノ厚サ二丈五尺、頂上一丈五尺アリ。其外面ハ、皆四角ナル煉化石ヲ積テ之ヲ築キ、内部ハ土ヲ以テ之ヲ充タシ、

上ニハ凹凸形ノ胸壁アリ。又壁中ニハ弓形ノ穴道、及ビ小門等ヲ設ケ、六十間毎ニ堡塞ヲ備ヘリ。而シテ秦祀忽焉トシテ絶エ、瓦崩レ門壞ル、モ、人ノ之ヲ修理スルナク、風雨ニ暴露スルコト今ニ二千餘年ナリ。感慨何ゾ堪エン。唯洋夷ノ時々來テ予ガ大小廣狹ヲ測定シ、目シテ世界第一ノ城壁ト爲シ、或ハ世界第一ノ土功ト爲スヲ聞キ、私カニ淑ニスルコトアルノミ。

秦の血食が盛んに續て有つたら、随分手入も行届き、まさか今日の様に荒れ果てた草原の中へ、うちやうて置きは仕ないでせうが、今では誰も構つて呉れる人が無いので、心細く考へた者と見へ、五尺桶を倒さにした時の様な大涙を、何處からかホロ／＼覆したさうです。

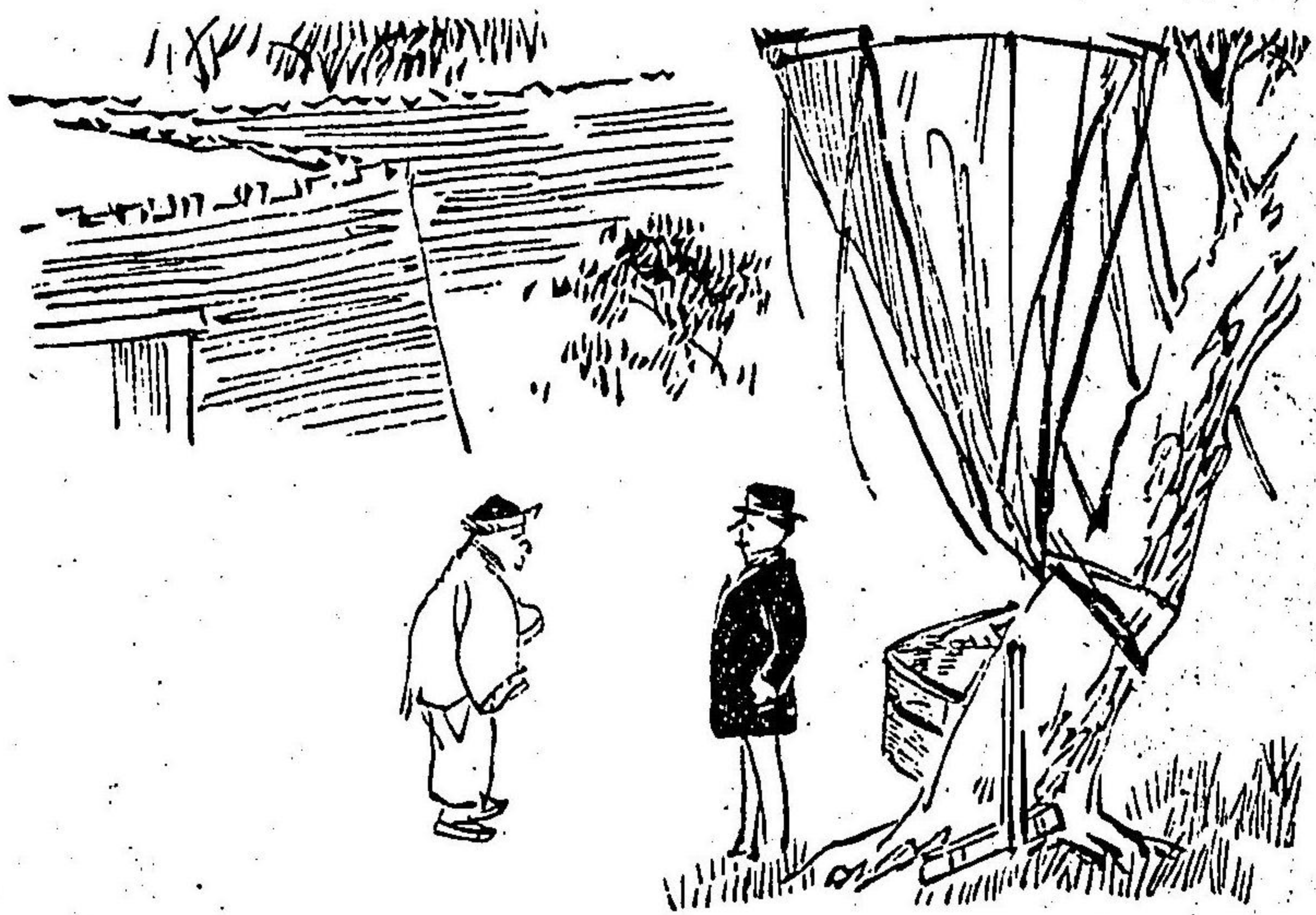
前申す通り、長城は二千餘歳の年寄で、支那國の歴史は、大抵記憶して居ますから、『支那は世界第一の舊國ださうだが、相違はないか』と尋ね

ると。

然リ、々々、豈敢テ異議アラシヤ。中華ノ世界第一。舊キ、史ニ據テ明カ  
 ナリ。上古史ノ茫漠タルハ暫ク措テ問ハザルモ、堯舜以來四千年、載籍  
 ノ見ルベキ者甚ダ多ク、當時既ニ文字、曆算、醫藥ノ方ハ、他邦ニ先ダツテ  
 具ニ備ハレリ。何ゾ圖ラン、近來聞ク所ニ據レバ、外夷猥リニ附會捏造  
 シテ、中華當時ノ文物ハ、馬比倫ノ開化ヲ輸入シタル者トナスアリ。知  
 ラズ、彼ハ却テ此ヲ輸入シタル者ナルヲ。唯中華ノ學士ノ、經史詩文ニ  
 固着シテ、日新ノ理科ヲ攻究シ、國利ヲ籌畫スルヲ知ラザルハ、即チ  
 大謬見ニシテ、遂ニ今日ノ外侮ヲ速キタル故ナラン。子幸ニ、中華ヲ以  
 テ、世界第一ノ自尊國頑固國ト爲ス勿レ。

と答へました。散史は常に滑稽など語る男なもんですから、何氣なく「お  
 國の人民は、世界上何處の國へ往つても、牛馬同様の器械的勞働を仕て居

るから、お國は世界第一の出稼人輸出  
 國では有ませんか』と言つた所が長城  
 は、そりや、どうも大怒りで『中華人の出  
 かせぎするのは、皆盡忠報國の赤心か  
 ら起るとで、アラビヤ國から馬匹を輸  
 出するのは大違ひだ。孟子の敢て利  
 を言はんや、唯仁義あるのみといふ語  
 に一致してる。』なんと、長々しい説明  
 を始められて見ると、聞きたくなくて  
 も、中途にして逃るゝとも出來ず、欠伸と  
 殺して聞き終りましたが、此の答辨を  
 すると、又無益に時間を潰しますから、



程よく返辭して立ち分れました。

散史は是から西藏國の奇樹を尋ねる積りですから、又飛び上つて西の方と目指し、望遠鏡で下を見ては、地圖に見くらべ、往くと二時間許りで、西藏國のコンブームといふ寺院を見付けて其處に降りました。此の寺院の直ぐ近くにある、世界第一の奇樹は、高は僅か八尺許りで、左程高くはありませんが、古い樹には違ひなく見えます。幹の圍りは、丁度四人抱への太で、枝は四方に垂下がって居るから、遠くから見ると鳥が兩つの翼を廣げた時の様な形を爲て居ます。して幹は巴旦杏の様で、少し赤く、肉桂の様な芳ばしい香があります。此樹が、其んなに大きくもないのに、何故世界第一珍らしいかといふに、何の葉にも、西藏國の文字が顯はれて居るのですが、變な樹もあるもんでございませぬ。よく見ると、葉の色よりは、ズット濃く、其上に判明とした文字が、明々と見えまして、葉のさきに見えるのもあり、又は中頃に、又は縁などに見えます。又若葉を見ると、半分文字に成り掛つた、文字の子と言つて能いのもあります。また、更に不思議なのは、葉許りでなく、皮にも枝にも文字が見え、上層を剥ぐと下層に薄く見え、又新層に出る新しい文字は、舊層の文字と其の体が違ふのですから、一口にいふと、身体残らず、文字の摸様づきの樹でございませぬ。此の奇樹が、散史の問ひに答へた處を聞きますと、西藏人や韃靼支那人は、皆此の樹を尊んで、佛の樹と仕て置きます。西藏は、佛法の最も盛んな國ですから、又支那の或る天子は、銀製の蓋で、之を覆ふた事もあるやうです。し、西洋人の往つて見た者も、澤山有つたが、皆驚いた計りで、研究を遂げた者はございませぬ。先年、此の樹の子孫を欲しがって、挿木や實蒔を仕た者も有つたが、皆生長しなかつたさうで、『全世界上に、予れ一本より外には無い。』といふのを鼻にかけ、應接向きでも何んでも、大層横柄でございませぬ。

十九

が散史に年齢を尋ねられた時は、困ったもんと見えて『お耻かしいが、愚老は餘り老年になつて、記憶の力も乏しく、年齢は幾歳やら、確と分りませぬ。』と答へました。

奇樹の見物も済みましたから、散史は忙いで印度を指して立ち去りました。程なくヒマラヤ山脈を越えることになりました。此の山脈は、支那と印度の國境にわつて、其高は千六百丈から千八百丈までありまして、世界第一高くございます。又、此の山脈の中で、エバレストといふ峰は、世界第一高い峯でして、海の水面上より高いと、二千九百二十三丈餘ありますから、日本の富士山(高一千四百七丈)より、二倍も高うございます。斯んな高い山になると、一番高い處は、雪で包んで居ますが、其下は寒帯の草木、其下は温帯熱帯の草木と、段々高さに依つて、異類の草木が生へて居るので、植物學研究の人の爲めには、大層便利でございます。ヒマラヤ山脈は

急ぐ旅でもあるから、一通り見た計りで過ぎましたが、ヒマラヤ山脈の南方は、即ち印度でございます。先年、宗教上の事で、當國に渡つた林香月といふ友人は、只今當國の首府カルコッタに居ますから、眞直に林氏の宅を尋ねた所が、運よく宅に居まして、『久々の面會でもあり、遠い異郷に逢ふたのは、珍らしくもわれは、是非今夜は一泊致せ。』といふ親切の勧めです。から、忌む譯もなく、開た口に牡丹餅と考へて、今晚は此處に世話になることに成りました。

夜になつて、林氏が、色々の奇事を話さるゝ序で、近日發行になつた官報ヒヤとて、左の刷物を出して見せられました。之を見たなら、皆さんも驚くでせう。

一千八百八十七年に於て、英領印度人民の、野獸の爲めに殺害されたる調。



惣數二萬四千八百四十一人。其中二萬二千百三十四人は蛇、九百二十八人は虎、二百二十二人は狼、百九十四人は豹、百十三人は熊、五十七人は象、廿四人ははいなの爲めに殺され残り千百六十九人は主簿蟲じやかる(山狗ノ類、蜥蜴、鱒魚、水牛、狂犬及び狐等に因りて殺され、而して之を撲殺せんが爲め、政府より年々巨額の金を支出したり。

印度人民は、進んでは、虎より猛しい英吉利政府の爲に苦められ、退いては、右の通り猛獸毒蛇に噛み殺され、生ながら修羅場裡の鬼となつて、生た空の無い生活をしていきますから、林氏と此の苦界から助け出して、自由幸福の民としてやるは、志士仁人の義務なれば、是非相當の企ては爲たいもの。』と、夜更け迄談論して過ぎましたから、明日は散史の歐羅巴渡りをお話申します。

## 第二日。

明れば一月三日の朝、散史は、カルコッタ府林氏の宅に起き、食事も済みましたから、『十日翁』を出して、往く先の順路などを、林氏と一ツ處に見て居ました。今日眞先に尋ねべきものは、針金でございます。林氏は之を見て、小首を傾げましたが、親切な異見を始めました。『成る程、彼の針金は、六百餘丈の長さあるから、世界第一長い針金には違ひないが、唯、當國ベツラどセクナナグラムとの間にある、キスツナ河の上百二十丈許りの處に架つて、並の電信線針金ですから、別段見物する程の價値もなからう。』といふのであります。斯う聞いて見ると、實際見たも同様の事であり、又、並の電信線なら、そんなに態々尋ねる程の貨物でもありませんから、林氏の言ふ通り、直に歐羅巴に渡る用意をいたしました。

林氏の宅を昇つてからは、柁を西北に取り、少し速力を増して、翅を使ひ

ましたが、幸に天氣は麗かで、風なく、氣候頗る溫暖でしたから、昨日より、心持がズット愉快に覺えたさうでございませう。そして、亞細亞と歐羅巴の間に在る、世界第一の鹹湖(鹹湖とは海の水と同じく、鹽氣のある湖水でありますから、日本の琵琶湖などとはちがひます。裏海の上を通りまして、此の鹹湖の最も長い處は七百六十哩、最も廣い所は二百七十哩、面積十八萬方哩ありまして、海面よりは八丈四尺程低うございませう。猶太にも、グレートサルトといふ鹹湖があります。長さは殆んど九十哩、幅は二十哩から二十五哩位ですから、裏海よりは餘程小さうございませう。

散史が印度を飛び去つてから、凡そ四時間で、漸く魯西亞の國モスコイ府に着いたのですが、同府クレムリンにある、世界第一の大鐘を尋ねる了簡でございませう。實際一見すると、實に珍らしい大鐘でして、其の底部の周圍は、殆んど六丈八尺、高は二丈一尺に餘り、重量が十九萬六千餘斤

ありますから、『斯んなに重い物を、逆も釣り上げる事は出来まいが、どうして。』と聞くと、『目今置く處で鑄たものか知らん。』と答へられたさうです。そして、其の一邊に破壊れてる部分があります。此の鐘は、火の上で鑄造する時、鑄型が熱く焼けてるのに、急に冷水を掛けた爲めに出来たといふとは、大鐘の白狀で明かに分つて居ます。此鐘の見物を仕舞ば、西部歐羅巴に出るのでございませうが、餘り身體を使つては善くないと云ふ所から、贅澤に瀛車に乗りました。

此の節は、何處の隅でも鐵道の据えてない所は無位であります。から、モスコイ府を發車すると、間もなく、埃利亞國も過ぎて、瑞西國の隧道の中へ入れられました。散史の同室に、少し許り日本語を喰いかじつた、フランスの商人が一人居ましたが、此の人は、一月に二三回づゝ此鐵道に乗るさうで、能く此邊の事に精しうございませう。種々の話の中、この隧

道の事を聞きましました所が得たり顔に答へてくれました。世界第一長い隧道は、リユールンとミランの間にある。此のセントゴサード隧道で、長三里廿七町、幅二丈六尺四分、高一丈九尺三分、二あります。其の外長い隧道では、佛蘭西と伊太利の境にある、モントセンスの隧道は、延長三里六町餘あつて、十二年に出来上り、米國のホーサック隧道は、長一里廿一町餘、幅二丈六尺、高二丈一尺、半あつて、今と去ると十三年前に落成した者である。他の比較までとて話されました。

右の話の中に、隧道も過ぎたし、佛人も、間もなく、汽車から下りたが、道程の近いですから、直ぐ白耳義國に着いて、其の書籍館にある世界第二古い新聞紙を尋ねました。一体、新聞紙の始めは、何處が一番古いかといふと、丁度、東京市中の飴屋の看板は、何處の看板を見ても、『元祖白玉飴』と書き、向島の土手に出る櫻餅は、皆『本家さくらもち』と書てあると同じ

じい事で、新聞の元祖を自慢する國が、幾らもあります。英國では、『世界上新聞の元祖は、千五百八十八年(今より三百一年前)に刷り出した英語新聞』など、言つて偽物を拵へて貯藏して置く位でございます。併し、眞の新聞の元祖は、アンブール府の活版師、アブラアム、フェルホーフェンが官許を得て、千六百十五年(二百七十四年前)から、國の内外の事柄を掲載した新聞紙を發行したのでございます。今散史が尋ねて往つた書籍館にあるのは、此の新聞の最も古い、千六百十六年の刷り出しでございます。此の新聞も、始の中は、事柄の出来次第、時日に構はず、刷り出して居たのです。が、千六百十七年四月十九日の紙上、社告の欄内に、『自今定時刊行として、時日を誤らず、且つ重要なる外國の報道は、怠らず掲載すべし。』と書てあります。から、此の時から、只今の新聞紙の様な体裁になつたのでありませう。我が國の日刊新聞で、今まで引續て居る一番古いのは、明治四年

四月に刷り出した、今の毎日新聞(舊名東京横濱毎日新聞)であります。

日本には、まだ新聞紙館といふやうな、建物はありませんが、フロシヤ國のエイクス、ラシヤベル府にいくと、新聞紙博聚館といふものがあります。この家に藏してある、イリニエミチーテット、クチャードルーブル、コンステレ一シヨーンといふ新聞紙は、一千八百五十八年に、米國ニユーヨーク府から發刊になつたもので、世界第一の大新聞でございます。名を讀むにさへも、二日半もかゝりさうです。先づ其の大さは、球つき臺のはどあつて、たて八尺半に横六尺、一部は八ペーシ、一ペーシは十三欄、一欄の長さは四尺ありますから、實に新聞紙中の大王でございます。これは、米國の獨立になつた布告の出た日に、始めて世に出た新聞で、百年毎に印刷する、やはり定時刊行新聞であります。なんと、氣の長い、ノンキな新聞ではありませんか。其紙質は、極々丈夫であつて、一連の重さが四十〜九百日程あります。

此第一號を刷り出すときには、四十人の職工が、八週間續けて勞働さ、やど出來上つたと申します。代金は、一部五十錢であります。當時二萬八千部を賣捌いたさうです。だが、今日に残つてゐるのは、僅か二三部位のもんでせう。其記事の目錄ばかりでも、一部の大本になります。もし此新聞の記事を、世界第一の小新聞、墨斯古グマラシヤ市から發行する、エルトレグテマに轉載しようとするには、凡そ二百部に續きます。なんと、話にも何にもならぬ新聞ではありませんか。特に、此のスパラエしい八大ペーシの中、に、廣告としては、唯の一つもないのは、最も珍らしい事におもひました。

散史は、其れから、隣國日耳曼の西部ヴ井リンゲンの時計製造所にある、世界第一精巧の置時計を見ました。が、時計とは、大針と小針があつて、十二時間を指すもの。』とばかり考へてゐる散史ですから、此時計には、臆魂も

潰れたでせう。先づ其の荒増をいふなら、針先で秒分時日月四期年閏年は知れますし、一秒から九萬九千九百九十九秒までを細かに書いておるとは、並の時計の一時から十二時までの時間を書いて置くと同く、一分毎、廿五分毎、一時間毎には鳴りますし、日蝕月蝕も分ります。時計の周回には、大勢の人形が色々の働きをして居りまして、晝は一時間毎に、喇叭手が喇叭を吹き、夜は哨兵が出て角を吹き、夜明になると、鶏が起る時を知らせるやら、春夏には、杜鵑が鳴くやら、又耶蘇基督が天に昇る際に、之を守護して居った天人の時計と一處に運動するやら、老人の膝ついて經文を讀んでるのがあるやら、其の外數多の繪があつて、互に廣がるやら、卷かるやら、或は世界創造の七圖が、順序を追ふて出て來たかと思へば、或は耶蘇一代の行狀を、十四段に分けて書いた圖面の順次に回轉るやら、一ツの時計に、活人形芝居も、鏡も、眼鏡も、曆も仕掛けてをりますから、世

界に類の無いのも、當り前でございます。

九月十日

散史は、又此の日耳曼國にある、世界第一快く進行する、甲鐵巡洋艦グリーフ號を實見しました。排水量は二千噸あつて、五千四百馬力をもつてをります。近頃の試験では此艦は、キエル港からウヰルヘルムシエーフン港までの間を、一時間二十三「ノット」の速力で走つたそうです。日本第一の軍艦といつてをる、浪速高千穂の二艦は、各十九「ノット」でございます。から、此のセルマンの軍艦には及びません。又我國の八重山艦は、報知艦として、海邊に事あるとき、敵の軍艦近傍に出沒し、又は急事を要する場合に、軍略上かけ引となすものでありますから、速力は二十「ノット」をもつてをります。其報知艦より速力大なる巡洋艦とは、おぼろぎました。

此次に尋ねましたのが、獨逸伯林府の近くスペーレンベルグにある、世界第一深い井でございます。此の井は、二十二年前から、四年掛けて出來

上ったのですが、深さは十一町三十九間程あつて、地球の内部の地質を研究する爲めに掘ったものであります。何處に限らず、土地を深く這入つて往くと、温度の増すとは定めて居ますが、此の井の摸様を聞くと、上層は攝氏寒暖計の八度から十度まで、すが其の底は、三十八度あるさうですから、人間が一寸も居るとは出来ません。なせといふに、人の血温は、四十二度を越すと、屹度死ぬからであります。前の様な色々の研究からして、地球内部の温度は、十八間を下る毎に、一度づゝ増すといふことが定り、此の割合で、段々地球の中へ六里も下つて往くと、大抵の物は、皆眞紅に焼けて溶けて仕舞ひ、十四里も下つて往くと、一番溶け難い粘土でさへ溶けて仕舞ふさうですから、地球の内部は、火の汁に相違ないといふ推論が起るの  
でございます。

もはや、瑞西、日耳曼等、各國の名所見物も済みました。が、まだ日も高いもんですから、僅かの海を隔て、北の方にある、丁抹國の首府コーペンヘーゲンに渡りました。が、當府には、世界第一廣い、ゲーナ公園があるの  
でございます。此の公園は、坪數千七百五町六反歩程ありまして、小河で園中を幾區にも分けておきます。泉水や築山などは、日本流義と違ひますが、樹木の多いと、遊歩歡樂の種の多いと、奇麗などは、一月二月遊んだつて、何處の隅を遊んだか知れませんが、面白いに紛れて、日の暮れる迄居ました。が、此處で夜を明すとも出来ませんから、ホテルに投宿して、旅の勞れを休めるといたし、今日の遊覽は此れで幕といたします。

## 第三日。

拙者は、眞高古苦齋と申す變的な名の動物で、諸君には始めてのお顔見世でございます。昨日は師匠研堂が、研堂散史と云ふ方の、二日目旅行談を申し上げたさうですが、今日は、散史の丁抹の首府を立て、其の領地は八

百五十五萬七千五百五十八萬方哩、即ち地球上陸地の六ヶ一より多く、そして、全地球上人民の殆んど六ヶ一を支配して居る、世界第一の帝國——英吉利(ロシアは、八百三十五萬千九百四十方哩、あつて其の二位に位し、アメリカ合衆國はアラスカ州を加へて、三百五十八萬二千四百四十二方哩、あつて、最大國の第三位に位す。——へ渡つたお話ですから、是非出席いたしたいと申して居つたのですけれども、餘義無い用が到來して出かねるから、拙者に『一席だけ代言を仕る』といふ仰せですから、『代言人の免狀は無』と斷つた所が、『法律上の代言人と違つて、免狀は何するもんか。』と一本參つて、アイタ、ではない、叱り付けられたので、百萬遍程稽古して、百萬遍程復習して來ましたから、師匠研堂の話と同等の價值、即ちヴロリウがあるに違ひはない。如何となれば、ナンダ政談演說會では無つた、さて、散史は三日目の早朝に、丁抹國コーペンハーゲンのホテルを出

發して西に向き、英國龍動に渡り、日本公使館詰の親玉、花畑薫氏と尋ねました處が、まだ起きた許りといふ處でした。どうせ、田舎客が都の從弟尋ねた時の様に、ゆっくりと花畑氏の厄介になつて、方々見物する積りです。から、そんなに急がず、悠然と上り込んで、奥の間に待て居る中に、頼て花畑氏も出て來て、一通りの挨拶も済みました。が、花君も随分奇な事をする男じや。驚奇な事して何。花何もない彼の廣告。驚廣告に何爲るもんか。花あの日々新聞の廣告。驚日々新聞へ出てるか。花まだ見ないんじや無からふ。驚なに見るもんか。執事にいひ付けて直ぐ出發したから、花そんなら白ばれるんじや無いか知ら。……といひ乍ら、起つて一枚の新聞を持って來たから、見ました處が、しかも特別廣告の眞先に、左の廣告でございます。——日本にて一月二日に發行せし新聞紙を、英國で一月四日に見るとのできるも、亦文明世界の恩澤でせう。——

研堂儀世界十周の爲出發ニ付敬告仕候。

二月二日。

研堂執事

散史も呆れて言葉が出ませんが、全く筆者が植字師が、一の字と十の字を間違ひた事が分り、二人共に大笑で済みました。が時刻が来たので、花畑氏は公使館へ詰めましたし、跡で散史が日數と繰って見ると、中々間に合ひさうでもありませんから、亞非利加へは渡らぬ工夫をして、亞非利加の大物共へ、電書を出して呼び出す事にしました。日本にはまだ有ません。が英國等には郵便のものと早い電書便があつて、此れに書状を出せば、どんな遠い處でも、チヨットの間に、テキレツノパと届くさうですから、至極便利でございます。そして、其呼出状は、左の通りでございます。

世界第一の三尖塔。

世界第一の石像。

世界第一の高碑。

世界第一の沙漠。

右の者共に對し、至急相尋る儀候條、明日午後四時迄に、遅刻なく佛國巴里府、ナンチエウホテル迄出頭すべし。

明治二十八年八月十九日 一月四日。

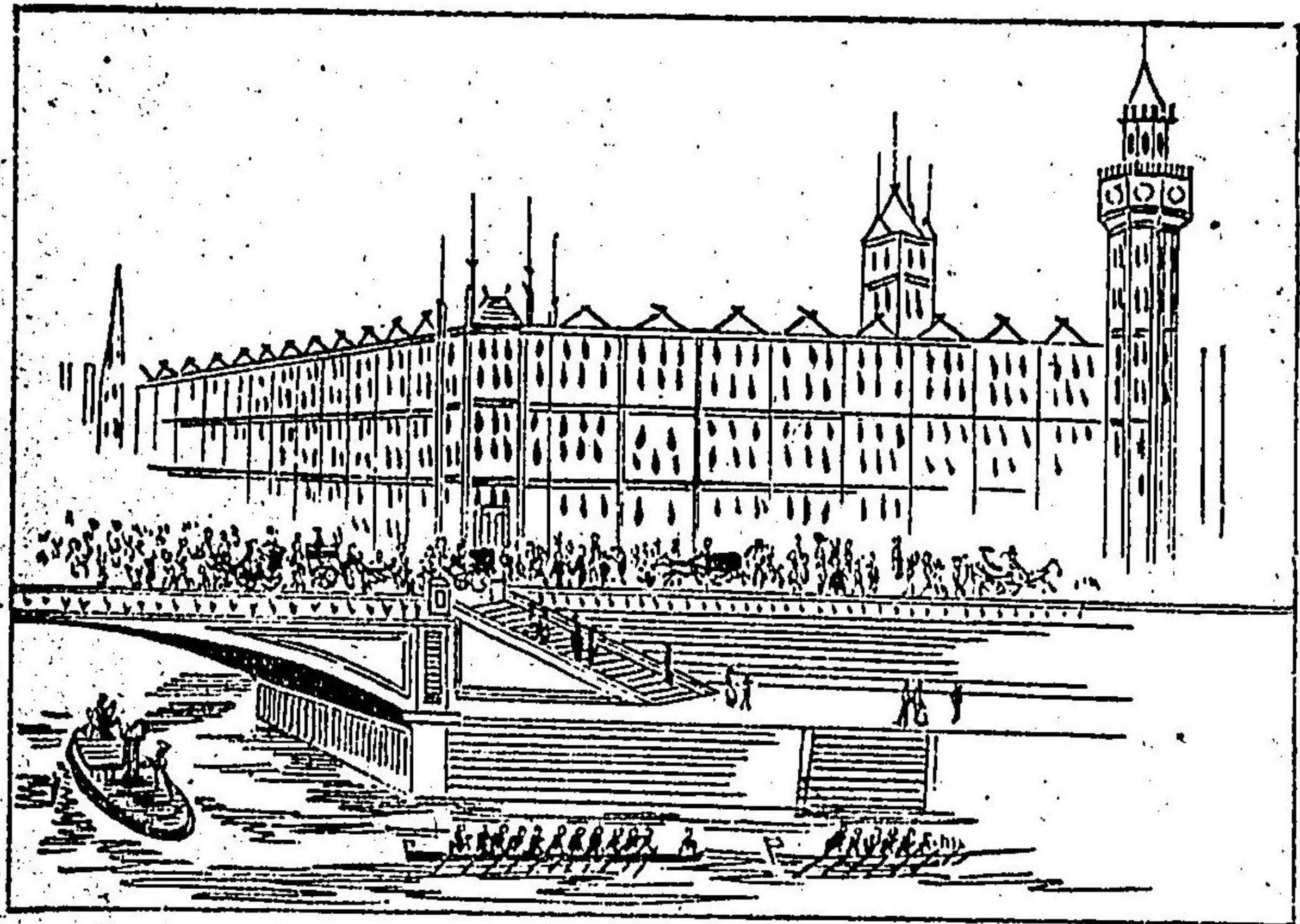
大日本帝國 研堂散史。

世界第一の都府は、只今散史の居まする、英國龍動でございまして、人口四百〇二萬八百七十一人（一八八五年の調）といふ大都ですから、人口二十萬といつて居る東京では、中々及びません。此の都の中にある、有名な龍動橋は、毎日幾ら位の人が通行するかといふとは、たれも聞きたく思つてゐる所であります。が、或る雑誌社で、數名の入夫を橋の上に配り、取調べた所が、歩行で通行した者が十一萬千八百七十三人、即ち一時間に四千六百六十一人。又平均三人づゝを乗せて通行した馬車が四萬五千輛、即



ち一時間一千四百五十八輛(本年四月二十二日のしらべなり)——四月の調べを一月に知りしも、亦文明の恩澤——あつたさうです。

散史は、此の大都の様や、龍動橋などを一見し、瀛車に乗って、西の方へ五十五哩許り行き、ナックスフナルド府に下りました。此の府と同名の學校は、昔エドワート、コンフヘツルの時代に、アルフレットといふ人の創建で、二十一年の學校と、五の廳堂あり、世界第一の大さな學校でございます。此の學校も見



ました。が、別にお話しする事もありませんから、世界第一のインキ商をお話し申ませう。

其インキ商は、ナックスフナルドより北に當る、エナバルク府のカロリオン町にある、フレイミングといふのですが、インキ製造を専業にして、店でございます。家屋は二町四方計りありまして、器械を据付けて之を製り、之を運ぶには、構内に瀛車と据えて、海岸に運び、其の支店は英、米、獨、佛、魯、埃、伊、などの大國は申すに及ばず、其他の殖民地にも設けて置きます。すし、何處の國に開ける博覽會へでも、一度も欠かさず、屹度出品するので、賞牌許りも、九十餘個持つて居ります。そして、散史の驚いたのは、其各國へ送った引札ですが、英語許りでなく、世界上何處の文でも書かないのは、ありません。我が日本の文は愚か、支那、朝鮮、埃及、ベルシヤ文を、残らず書いて置き、升から、世界中何處の人でも、讀めない者は無い趣向でございます。

います。文字を知らない者は、仕方がないが、同社主人の目論見では、萬國のインキを一手賣に仕ようと云ふのですが、大膽な男もあるもんです。散史は、暫く此の主人と物語りしてありましたが、此英國シヨエブリチス砲臺にしかけてある、世界第一の大砲は、重さ凡そ二萬二千貫目ありまして、壯快なる見ものでございますが、散史は、大きな風船玉をガラブラと脊負って、疝氣もちの一物のやうに、繁華な英國を旅行するには、邪魔になつて溜りませんから、遂に其の砲臺は實見いたさず、直ぐと午後三時頃、瀛車で龍動へ引返し、今夜は花畑氏の宅へ一泊して、明朝佛蘭西へ渡ります。師匠から『此處までお話し申し上げたら、諸君の鼻いびきの澤山無いうちに引込め。』と、堅く言付けられて参りましたから、御免を蒙ります。

## 第四日。

皆さんは、大層お早くからお詰下さつて、拙者の喜びは此上ありません。昨

日は、弟子古苦齋が代講でしたが、何な事を申し上げましたか分りませんが、重々御宿免を願ひます。明れば一月五日の朝、散史は龍動花畑氏の宅を辭つて、逆の様ではございますが、東へ向け、英佛兩國の間にある、ドブアル海峡の上を過ぎて、難なく巴利府の真中にある、ナンチエウホテルに着きました。此の海峡は、僅かの隔りですから、其の上に橋を架けて、英佛兩國を連ねる相談は、是れ迄度々ありましたが、纏まらないでしまひ、此程やうやく、兩國の委員會で、可決したさうです。其委員は、英國方フオウラル氏、ベツカ氏及び工部省技師一名、陸軍省委員一名、佛國方海軍將官一名、土木監督官一名、鐵道大技師一名及びクルーナー工場技師一名で組立てました。其橋は、長サ九里半、幅五町から五町半、高サ水面から廿八間以上で、鐵や石造の橋柱には、電氣燈を付けて、往たり來たりする船舶の便利に供へる目論見ですから、出來上りさへすれば、世界第一の長橋でござい

ます。長さ九里半といふと、東京から横濱までいさゝませんから、何とも評しようのない大物でございます。

フランス、パリには、散史の友人も幾人も居ますし、又、散史が昨日龍動に居たことを、巴利の新聞社が聞き付けましたので、府中大小の新聞は、皆不思議な遊歴者が来るさうじやと書き立てたので、一時大評判となりました。中にも可笑しいのは、フツヨーレル繪入新聞は、紙面一杯のポンチ畫を挿れて、『東洋の魔法使ひ』など題し、有ると無いこと、實事らしく書いたのでございます。そんな騒ぎでありますから、尋ねて来て呉れる人が、坐敷一杯に塞がって居まして、一々挨拶をしてると、今日中に當國の見物と濟すとは六しうござい升から、程善く斷つてホテルを出で、先づ當府に在る國王ルイ第十四世が設立した、世界第一の書籍館ビプリヨスキエナシヨナルへ往つて見ました。其家作りは、長九十間幅二十二間許りで、其

の中には、書籍百四十萬卷、一枚摺三十萬枚、書付十七萬五千種、地圖及び海里十五萬部、貨幣及び勳章十五萬種を保有し、百三十萬以上の銅版畫は、一萬卷に輯め、肖像の數殆んど十萬以上あります。

夫れから、是も矢張當府にある、世界第一の演劇場ニユーオペラへ往つて見ましたが、何か普請が有るといって、一寸休業中でありましたから、其の寫真を賣る店へ寄り、寫真を買つたり、其の大きさなどを聞きました。家作りの地坪は、一町二段二畝歩許りで、其の立方積は、四百二十八萬七千立方尺あり、丁度一億、フランス程の直打あるといふとでございます。散史は、眼をキヨロツカせて、見世前の油繪寫真類を見るうちに、世界第一の美婦ソツカレイ嬢と記いた肖像があるから、『是は白耳義國へ往つて居つた婦人ぢやないか』と尋ねた所が、『よくもござんじでございます。御意の通り、白耳義に永らく罷り越し在せしが、此の節は當府下に住はれ

ます。』といふ答でございます。是れ尋ねずんばあるべからずと、其の住所を聞いて書き留め、早速馬車を向けて往くと、小さくて小さざりした家の戸口に、丸提燈などはありませんが、標札があるので、此處なりと車から下り、呼鈴の紐を引くと、直に、十四五の下婢らしい男一本男女に作る。が出て来て、『どなた様』といふから、兼て覺悟の名刺は此時じやと、幅一尺長一尺五寸厚一寸許りの名刺とカバンから出して、『此者が一寸面調を乞ひます。』とした聲色で手に渡せば、間もなく、『こちらへお通り遊ばせ』といひますから、遠慮なく案内に付いて、ツン／＼往きました。すると二階の客間に通されましたが、流石有名の美婦人の居室でございますから、窓掛額面椅子、卓子、敷物等一切の飾り付け品の華美綺麗などは、金、銀、珠玉、瑛琥、瑪瑙、綾羅錦繡と、貴重品の目録を讀上げる様で、下手に申上げると、却て穢くなるから、申上げません。嬢は、孔雀のお化の様な仕度で、静々

と出て來ましたが、楊貴妃の鼻に小町姫の眼を合せ、衣通姫の肌色で仕上げた様な尤物でございます。雙方初對面の口上も濟むと、

『東洋の御君が、遙々妾を訪はせ玉ひ改つての御用とは、如何なる御事に候ぞ。』

「去ればでゝる拙者の推參致せしは、餘の儀にわらず。過日白耳義國の温泉場SPAに於て、舉行されたる美人共進會の其時に、御身は一等賞の撰に當り、一千弗の賞を得られし由、兼て聞き及びたれば、遊歴の序を以て當時の景況を承らんとす。』

『いと心易き其のお頼み、何かは隠し申すべき。此度の會は、ハアブ、ドロ、ウレイン氏の發起にて、二十二人の審査委員とやらを設け、此の人々の品定めしたる、一等より三等までの婦人に、二千弗の賞與を分ち與ふる仕組にていひま。』

散「共進の人数は、

「望の婦人より、各其寫真を送らしめ、審査人は、之につきて、優れ人と認めし二十一人をスパーに集め、十二日の間縦覽に供へてい。

散「縦覽人は、

「五フラン（日本の九十七錢ほどの）入場料を出せば、誰彼の差別なく入場して、品定めするとも、許されてい。

散「シテ、御身の年齢は、

「十八年にてい。

散「十日間周遊の種取り専務の研堂散史。是にて用事も果てたれば、お去らばお暇仕らん。

「マ、待つて下さんせ。そこがましきお願なれど、日本の殿子と聞くからは、兼々美術の本元と聞えし倭の美てふ事、一言なりとも聞かしてた

べ。

散「韋駝天は尙更のこと、地球の速力が汗を流して追かけても、迎も及ばぬ吾が早旅。一時も猶豫は出来ざれば、此の儀は御免を蒙りたし。

「見らるゝ通りいふせき住家申し上ぐるも耻かしけれど、今宵は御脚を留められ、是非に一坐の物語りを、何なり聞かして下さんすりや、御身の御恩は、ミヌシビの河より長く、ヒマラヤの山より高く、大西洋の底より深く、未來永劫に銘し、勿体ないが兩親の御恩に代へても忘れはせぬ。二つには、妾のはなしを聞き徳に、ロハでおん去りなさるとは、胴慾でござんすわいのう。どうぞ今宵は、く。

と、無い洋服の袖を引いて、放す景色も見えませんから、散史はヤッさと眼を怒らし。

散「何ほ言ッても、聞き分のない婦人。電光的の旅人が、いかでぬるゝ逗留

かなるものか加之、男女七歳にして席を同らせずとの戒めもあるに、  
 宿泊せよとは聞えぬ話し。ヨシ／＼分つた談話を聞くを餌にして我を  
 留め、夜中人定り物静かなる後ち、釣天井か陥穽若くは、モルヒネ半片、  
 物の見事に我を殺害し、手の善き山賊を爲さんがためならん。兎も角  
 も、外國人の旅行に對して妨害を爲す曲物を爲すの上は、棄て置く事相成  
 らず、警察官に引渡し、相當の處分を仰がずば、迎も十日間の世界一周  
 は覺束なし。我と一處に警衛に往くか。左なくば袖を放すか。サア  
 〳〳〳返答いかに。……

散史は、兼々、佛蘭西は芝居好きの國なるとは聞て居たし、マ嬢の聲色も、  
 中々驚も尾を振て逃げそうですから、神経が狂ふかどうかして、役者を  
 氣取り、追々だみ聲を張り上げ、仕舞には、煉瓦室も破れさうな聲になつて  
 來ましたから、溜りません。マ嬢の近所では、『ソレ、マ嬢の宅へ狼籍者が侵

入したとか、大聲の爲めに、安靜の自由を妨げられたとか、騒ぎ立てまし  
 て、散史は、マ嬢を警察官に渡す所では無い、自分が渡されさうになつたの  
 で、生命から／＼靴を逆につかけて逃げ出し、瘦馬に鞭あて、午後六時  
 頃漸くホテルに戻りました逃げ出すとき、嚇と上せたのが、まだ直らな  
 いので、耳は鳴る、目はシラ／＼しますが、生命を一つ拾つたのですから、先  
 づ安心して、への字なりに寢臺に臥し、地圖を開いて、今日見物した場所  
 道路などを見比べて居ると、宿の男がトン／＼やつて來て、『へー旦那今日  
 は何程かお草臥でございませう。アフリカのお客だといふお三人が、お  
 呼出しで罷り出でましたといつて、先刻からお待申して居りました。  
 散』ノー三人か。

男へーお三人様で……。

散』さうか。何の坐敷へか一寸待たして居け。

男へ一畏りました。

と言つて出て行く跡に、散史は夕飯も済み、一休みして、明日は立ちたいの  
ですが、呼出した者共が来て居たといふから、明日に延ばすことも出来  
ず、又取調べに掛りました。

三人此處へ出頭する。といふ御掟と共に、ゴロ／＼坐敷へ入つて来たの  
が、『世界第一の尖塔三角之助』『世界第一の高碑石造』『世界第一の沙漠廣  
次』の三人でして、前の順通り席に就きました。散史はキツト見渡し、  
散『世界第一の大像』はなせ出頭せぬか。

と一ツお目玉を呉れると、尖塔は代理を頼まれて参つた旨を委細申立ま  
したので坐も定り、散史は鳥無し、里の蝙蝠氣取りで、威張るのは、此の時  
と思ふ物から、至極横柄の身構ひをして、

散『其うち達を呼出した手は、大日本帝國政府より、名物視察として、世界一

周を命ぜられたる、研堂散史實名は吹事透太なるものにて、見らるゝ  
通り、各外國の帝王より贈られたる數個の勳章、一錢銅貨などを見せ  
て、下げたる高等官なり。亞非利加へも渡るべき筈なれども、承知の  
通り、亞非利加には見るべき場所更に少く、渡るも無益なれば、其方共  
を呼出したるなり。皆々能考へて、言ひ落しのなき様に申立てよ。若し  
毛頭たりとも偽を語り、上を欺くに於ては、此の一周記を讀む人々に  
對し、容易ならざる不屈に付、獄門申付くべければ、屹度心得よ。我國に  
は、大岡越前などといふ、石地藏を詮議した裁判官もありしなれば、其  
方共を獄門に掛けるも、仔細なき事なり。有体に一周記の材料を言上  
せよ。

鴛ハ、ア――。

是から、三人が白狀を始めましたが、言語は陳文漢で、さっぱり分らないか

ら、散史は腹を立て、

驚なんぼ野蠻の國でも、其んな口上が有るもんか。書面に認めて差出せど。』のお叱りです。から、三人は泣々有りもせぬ金を拂ひ、近所の代書會社にいつて書いて貰ひ、差出した面書は左の通りでございます。

乍、恐以ニ書付ニ申上候。

尖塔三角之助。

私儀は、アフリカ洲埃及國に暮し居候者にて、實名はナヨ一ブと申し、親族七十餘個の中、第一番大なる者に御座候。地はナイル河の水嵩高く増し候とも、水面上十三丈餘の平原、ギゼーに御座候て、名前の通り、形は三角に、全体花岡石にて積立候拙者共の出來候は、確と相分り不申候へ共、何れも三千歳以上に相成、拙者は、今より凡そ四千三百七十餘年前に、人夫十萬人と、三十餘年の時日を費し、ナチブス王の墳墓に作られ候様申し傳ひ居候。始の太さは、八千九百〇二萬八千立方尺有之

候處、カイロ府普請の節、外周りの石

を持ち去られ、今は瘦せて八千二百

十一萬一千立方尺に相成候。高サの儀

も、元は四十七丈九尺有之候へしに、

只今ハ、四十五丈と相成候。基礎の一

邊の長さは、七十六丈四尺候て、總体の

重サは、六百三十一萬六千噸、日本の十、

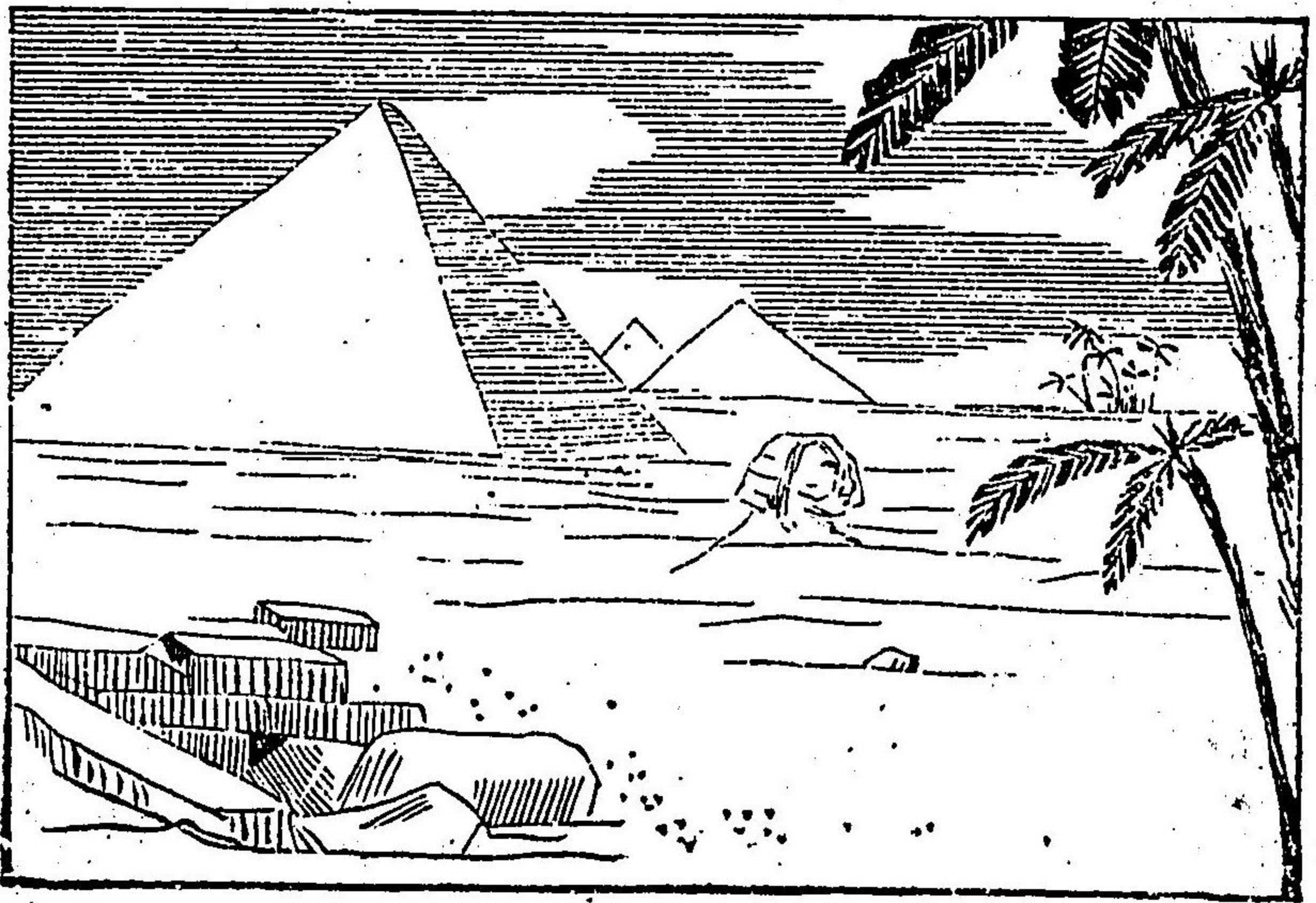
七億餘貫目有之候。近頃西洋人中に

古代の寶物を掘取らんとて、掘り起

す者有之、數多出て候風聞に御座候

へ共、拙者には見せ不申候。塔の中に、

石の棺有之、其の通行道も正しく出





來居り候。乍併、此塔内へ下る道は、色々曲り候へば、御實見不被遊候ては、中々分り兼候。右御答申上候也。恐惶頓首。

高碑石造

私儀は、ナイル河の東岸ラソソルに近き、カルナッタと申す昔のゼベスの地に當る所に在る、世界第一高い碑にて候。西洋紀元前千六百年の頃、王位に被爲在候フハローソズムス第三世の妹君ハタス女の頌徳標に御座候。惣体の長は、十二丈二尺、重量は四百噸、基礎を除き候ても、高十一丈程御座候へば、有名のセントラルパールの頌徳標基礎を立て高さ六丈九尺、重さ百六十八噸よりは、餘程高大に御座候。以上。

大像生理之助

代人 尖塔

私儀も、矢張埃及國に暮し候、實名オベリスクと呼ぶ、世界第一の石佛

に御座候へ共、數千年來風雨にさらされ、鼻もかけ頬もやせ、御本國の淺草觀音様の堂内に御座被遊びんづる尊者の様に、眼も鼻も僅か其の大体が分り居り候て、首より下は、土中に埋まり居り候へば、總体は何程有之、いかなる形かも相分り不申候。併し人頭獅身の神獸の蹲りたる体なりと噂致し候。只今地上に出で居り候頭の周圍は十七間、高さは五間、体の長八間餘有之候。先年砂土を掘り、穿鑿致し候節には、全身の高九間二尺、長廿八間四尺の由申傳候へ共、實際は是より大なるべく愚考仕候。前記の通り、肩より下は深く沙中に埋まり居り、寸歩も相叶不申に付、折角の御呼出恐入候へ共、以代人申上候。

沙漠廣次

私儀は、亞非利加洲の北部荒増を押領いたし居り候、實名サハラと申す、世界第一の沙原にて候。西は大西洋より、東はナイルの谷まで、東西

の長、殆ど一千里餘、南北の幅四百六七十里、其坪數四十二萬方里、即ち御本國日本總坪數の十七倍程有之、其の間は、人家も草木も無之、晝は案外に熱く、夜は少々涼しき事も有之、雨は五年十年或は二十年を隔て、偶に降ること有之、位の、人間以外の世界に御座候。此外何も可二申上事共無御座候也。

右四人の申立、毛頭相違無之爲、後日仍て如件。

三人姓名、捺印。

一月五日、

散史は之を受取つて、一應讀み下し、下がれ一の一聲に三人を引込ませました、其權幕は、裁判所の公判庭に居る、三十日五圓位の鬼共に些ども變りません。

三人も退出し、夜も十二時頃になりましたが、散史は明朝出立の積りです、十日翁や地圖を出して見てる中に、残念などを見出しました。

今日マ嬢の宅へ寄つたり何かしてゐる中、二三所の見物を残したのでございます。是はどう仕よう、明朝滞在しては居られない身体、去りて見ないで仕舞ふとも出来ず、扱々困つたと獨りあぐんでる所へ、又當國の美術協會長奇麗氏が尋ねて來たので、猶々困り入りました。睡い眼を摩りながら、どんな御用で御入來と尋ねると

「御身の御來遊なされし事、當國人民皆々承知いたし、是非御身の美術上の御意見を拜聴したしとて、其儀を討議に附し候處、國會の一致を以て可決し、紹介の事を、議長より拙者へ頼み越され候ため、罷り出候。明朝御出發の風聞故、夜中をも願みず、推參仕り候何卒、明日は御臨席下されたし。

との願ひでございますから、色々断つたが、中々聞き入れず「當國人民の満足は申す迄もなく、御國の御名譽にも相成るべければ

とたつての理責めでございますから、散史は暫らく黙つて居ましたが、此の時もし散史の心を解剖して見たなら、一々嬢にあれほど乞はれた時に忌と断つて今度此の頼みを承知したなら、信義に外れよう。又此れ程國會議長からの懇願を、無下に断つては、日本と佛國との國際上にも關るだるふ、此事をゐるこんに思つて、條約改正の時に、すねられもしては、吾國の損になるだらう。——可否の心が1/2づゝ、鬥つて居るでせう。併し、日本國の爲めになる事なら、何をも嫌はぬと決心して、明日の事は、委細承知の旨を答へましたので、奇麗氏も歸り、散史も枕に就き、今日の話は千秋樂でござります。

## 第五日

今日は、散史が佛國に逗留して、同國美術協會の爲めに演説を爲る日であり、散史は、昨夜一時頭枕に就てから、今日の演説の事を考へて、

寐ても眠られず。何の手で毛唐人共の鼻をもぎ取つて呉れようか。餘り虚言を語ると、昔と逢ふから、直ぐ化の皮が剥げるし、又本國の顔汚しになる様なども言はれないし、困つたことを受合つたと、ちつちつと考へて居る中、夜も明け、さだめの時間になると、六頭立の金銀製の馬車で、美術協會副會長フントー氏が出迎に参りました。そこで、同氏と相乗りで馳せ出しました。が、車の工合で、琴、三味線、ラツパ、風琴、バイオリン、大鼓、鉦、鉢、胡弓、月琴、尺八、を合せた様な鳴物が始り、チャンドンくの音聲に乗つて歩く様な心持です。から『コリヤ、美術協會の馬車は別段なもんじや。』と感心しました。が、二十分ほど過ぎて、鳴物が止だったので、ハテ不思議と思ふ中、何か地震する様に思ひました。是も直ぐ止り、ホ氏の案内に連れ窓を明けて出ると、見通しも出来ない程の三層樓上に來て居ました。『ハ、ア、是は下から釣り上げられたのじゃ。斯んな不思議な仲間へ來て、演説なんぞ

「嗚乎がましし」と思ひ乍ら歩み出すと、其綺麗な事、壯大なると、流石佛國の美術協會々堂には耻かしからぬ意匠結構風致でございます。散史は、暫時休憩の後、同國大統領を始め、朝野の美術家、豪商、紳士、貴女令嬢、新聞記者、幾十萬人となく居並び、海陸軍の樂隊奏樂と拍手の聲は、耳を破る斗りに鳴り立る間を通じて、正面の演壇に上り、場内の静かになるまで、暫く屹として直立して居ましたが、たどひ場内が静かになつたどて、何を演説しようか、まだ考ひ付きません。併し其處が大家丈けあつて、頓着せず、十三四分間、無言で居り、漸く唇を開きました。

小生、今日圖ラズ美術協會諸君ノ招ニ預リ、演説ノ請ヲ受クルモ、小生ハ素ト美術専門家ニ非ズ、世界第一學ノ専科生ナレバ、美術上ノ智識ノ淺薄ナルヲハ、諸君モ豫想セラレシナルベシ。故ニ余ハ余ノ専科ニ就テ述ブベケレバ、此段諒セラレヨ。

貴國ニハ、世界第一ノ名物多シト雖、多シハ工業的ノ尤物ニテ、日本ノ尤物トハ、大ニ其ノ趣チ異ニスル者アルヲ覺ユルナリ。日本全國ヲ統御スル君主ハ、神胤即チ我々臣民ノ本家タル、天神ノ血統ニテ繼承セラレ、開闢以來、未タ曾テ異姓人ノ其ノ間ニ交ルナシ。之ヲ世界第一美ナル天子ト云フモ、誰カ不可トセン。日本ノ高山富士岳ハ、其高僅カニ一千四百丈ニ過キザレ、八方玲瓏トシテ上ニ萬古ノ雪ヲ戴キ、皇統ト共ニ永ク消ユルコトナク、東海ノ表ニ屹立ズルハ、アンデス山高シト雖、ヒマラヤ山大ナリト雖、如何ンゾ其ノ容貌チ比スルヲ得ン。之ヲ世界第一美ナル山岳ト云フモ、誰カ啄チ容レンヤ。日本ノ國旗ハ、方旗内ニ旭日ヲ畫ケリ。周圍ノ直線ニ配スルニ曲線ノ圓チ以テシ、白地ニ眞紅ヲ點スルニ至リテハ、色彩上意匠上、共ニ世界第一美ナル國旗ト云フベシ。ヒヤ／＼活眼活論、豈何ソゾ、鷺鳥偶人等ヲ畫キ、群青

黄土ヲ以テ染メ散ラシタル物ト席ヲ同ウスベケンヤ。此ノ三ノ物ハ、  
世界絶無ノ美ニシテ、我國獨リ之ヲ占有セリ。眞ニ自贊ニ非ザルナリ。  
繪畫彫刻漆陶器ノ美ニ至リテハ、諸君ノ親シク知ラル、所ナレハ贅  
セズ。

百聞ハ一見ニ如カズトノ諺アリ。眞ニ然ルガ如シ。貴國人某氏、昨日  
予ニ語リテ曰ク『日本人ノ足ハ、世界第一大ナリ。ヨシ長サ一メートル前  
後ノ鐵鞋ヲ穿ツ。』此ノ人、日本畫中ニ於テ、仁王堂前ニ懸垂セル草鞋  
ヲ見、日本人ノ足ヲ速了セシ者ナリ。彼ノ草鞋(或ハ鐵鞋)ハ、信者ノ奉納  
品ニシテ、常人ノ穿テ得ベキ物ニ非ズ。唯草鞋ノ放大標本ト見ルベキ  
ノミ。實物ヲ一見セザルノ弊斯クノ如シ。諸君ハ日本ノ日光ヲ見シガ、  
(見シ者無キハ、はらチ吹ク爲メト知ルベシ)日光ヲ見ザルハ殘念ナ  
リ。乞フ少シク之ヲ説クヲ恕セ。

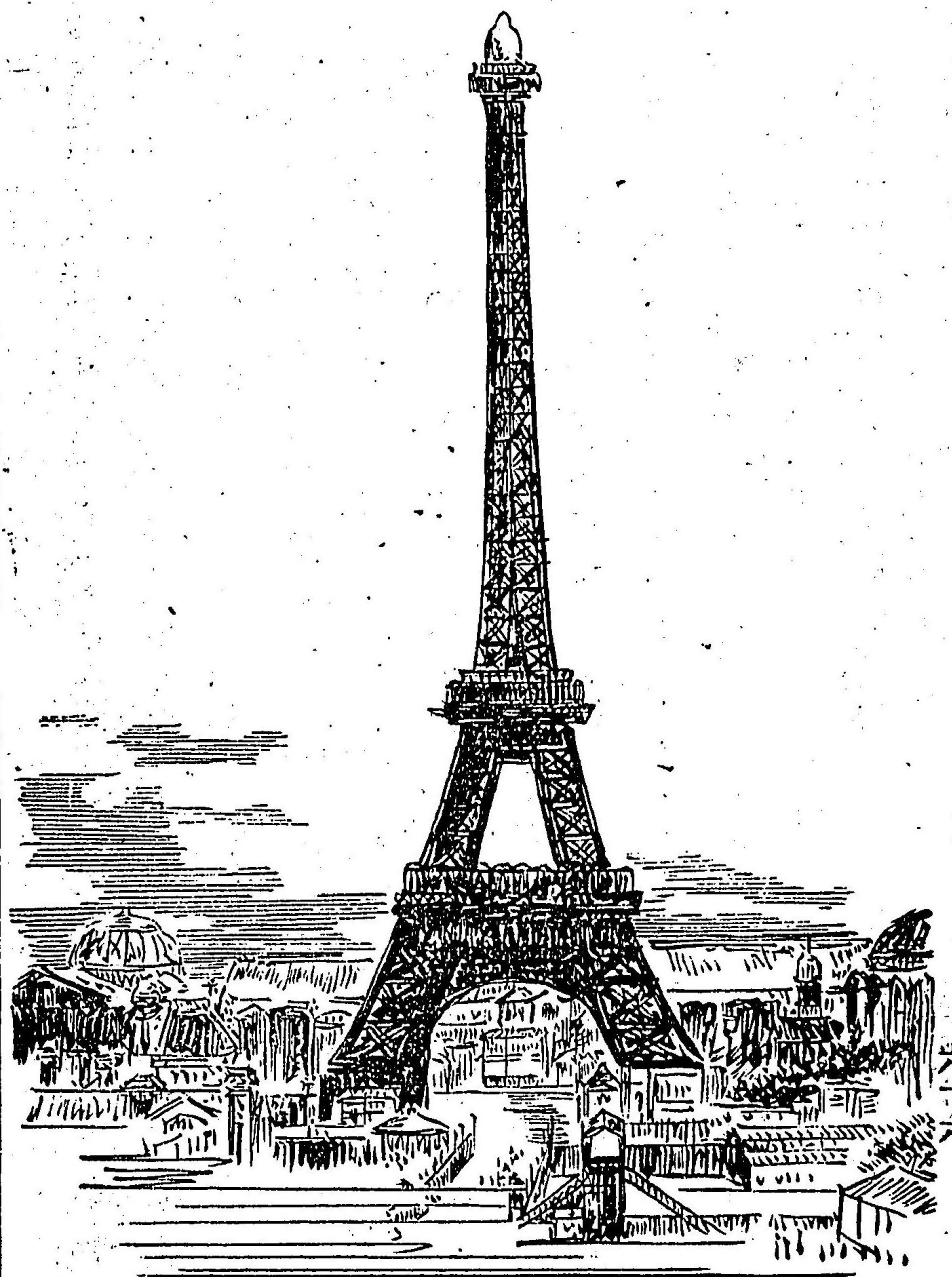
日光ノ廟ハ、徳川家ノ墳塋ノ在ル所ニシテ、大小家屋ノ數ハ百ヲ以  
テ數フベシ。殿堂樓閣、高低相映シ、琉璃ノ高欄車渠ノぎぼら、珠玉ノや  
うらく金ノ天蓋、伽羅ノ床板ニ七寶ノ寶珠、燈籠ノ腹ヲ爲ス白大ノ金  
剛石門柱ノ體ヲ爲ス扶桑大ノ珊瑚樹、悉ク加羅日本天竺ノ精ヲ萃メ  
美ヲ輸シ、一トノ人間界ノ奇品ニ非ザルハナク、和莊兵衛ガ巡覽シタ  
リシ、清淨國ノ京城モ、恐クハ三舍ヲ避クベシ。彫剛ノ精紋様ノ巧ハ暫  
ク措キ、屋瓦十枚ヲ以テ全世界ノ土地ヲ購ヒ得ベシ。皆純金ナレハナ  
リ。社ノ門前ニ標シテ曰ク『眼質ノ弱キ者、及ビ眼病者ハ參詣ヲ禁ズ。』ト、  
蓋シ金碧煌耀トシテ反射強ク、一タビ此ノ境ニ入レバ、壯眼者モ痛ミチ  
感ズレハナリ。之ヲ世界第一美ナル建築ト云フモ、誰カ不可トセン。諸  
君若シ杖ヲ曳カントセバ、余ハ何時ニテモ、東道ノ勞ヲ辭セザルベシ。  
(黄金ノ瓦ト眼病云々ノ事ハ、佛人聞テ眞事トナスベシ。故ニ曰ク百聞

ハ一見ニ如カズ)

と傍聴人の中には、数名の日本人居つたにも構はず、天賦羅演説を滔々として三時間許り仕ました。が終つて壇を下ると、満堂崩るゝ許りの拍手の響きでして、来て手を握る人もあり、頬を嘗める人もあり、吻と接ける人もあり、身の周圍に五月蠅ほと寄せ集まりました。が大統領や會長奇氏と一寸立談した許りで、また忙がしいからと斷つて、程よく其の場を立退き、親しき二三人を連れて、左の數件を見聞しました。

世界第一の高塔。 エッフェル塔は、巴利府シヤンデマーの萬國博覽會々場の入口に建築したる物にて、佛人エッフェル氏の設立により、一昨年の春より着手したるものなり。高さ二丁四十五間あれば、古より世界の高塔と聞えし、米國ワシントンの紀念碑(高一丁三十一間)、日耳曼のコロッセウ塔(高一丁廿五間)、埃太利のセントステフェン寺塔(高一丁十八間)も、殆

んど其の半にて、淺草の十二層凌雲閣(高さ二十七間)を、凡そ四半繼ぎ足したるものと同じ。頂上の處四丈許り、未だ落成せざれども、來四月頃には、成功の見込なり。塔の昇降口は六つありて、七分間に昇降するを得べく、落成の上は、天文、物理等、種々の觀測を爲し得らるゝ爲め、當國の學者達は喜び合へり。此の用材は、總て鐵にして、費用は五六百萬フラン(一フランは、日本の十九錢三厘なれば、百餘萬圓に當る)を要し、内百五十萬フランは、政府よりの補助金にて、残り高は、開場中の登覽料にて償却し、尙ほ幾分の利潤あるべく、又二十年の後、始めて巴里府民の所有となる約定なりといふ。此の後、本年四月廿三日刊行の佛國ルタン新聞(四月の新聞を、一月に見得るに非ずんば、十日間に世界を一周すべからず)に、博覽會公報によりて、公衆の昇覽に關する報告を摘記せる所に據れば、右エッフェル塔建築の特許を受けたる者は、定款に従ひ、同塔の第一層には、一



時間二千三百五十六人、其絶頂には、一時間七百五十人を限り昇覽せしむべき者とす。其の昇覽料は、第一層まで二フラン（我が三十九錢ほど）、第二層まで三フラン、絶頂まで五フラン（我が九十七錢ほど）と定む。但し日曜日には昇覽料を引下げ、第一層まで一フラン五十參、絶頂までは二フランとす。此の料は、午前十一時より午後六時迄、適用すべき者なり。又同塔の事務所は、監査に便する爲め、十六ヶ所の切符賣捌を設け、其内十ヶ所は地面に、四ヶ所は第一層に、二ヶ所は第二層に置き、此處にて昇覽切符を渡すものとす。其切符は、第一層は赤色、第二層は白色、絶頂は白色を用ひる筈なりと。而して、愈五月十五日より、公衆の昇覽を許せしに、日々の昇覽者無數なりと聞けり。佛人の、常に思ひ切つたる工事等を起して、世人を驚嘆せしむるは、五洲人の及ばざる所なり。

其後に得たる報によれば、博覽會開會中、エッフェル塔の收入高は、わが金

貨一百三十萬圓に達せしといふ。又此塔の第三層即ち最上層には、數脚の椅子をおき、縦覽人の此層に至るものあれば、直ちに、端書(端書は並のものと同じきも、一面にエッフェル塔の圖を描きたるは、定めて廣告の意に出でたるものなるべし)と、空氣球とを賣付け、何月何日此塔に上りたる旨を記し、之を空氣球と共に放たしむるか、或は別々に、端書をば、傍へに備へおきたる郵便函に投入し、空氣球も亦隨意に之を空氣中に飛び去らしむるの趣向豫てより備はりたる由。されば、或る縦覽人の如きは、此塔上にて、空氣球に結び付けたる端書を放ちたるに、風の吹きまはしにて、一日を経たる後、隣り邦ドイツの或る市人に拾はれ、幾多の郵便局を煩はして、再び該塔に達したりといふ。

世界第一の博覽會。 明治二十二年、巴里に於て開きたる、萬國大博覽會は、實に今古無双といふべきものにて、其規模の宏大なるは論なく、

同會閉場の日の一班を記さんに、當日の縦覽者は、無慮三十七萬人に達したり。其他、午後五時に於て、特別券を携へ來りしものを合すれば、其實に、五十一萬千人なりといふ。又同會開會中の縦覽人を、前年度の數に比すれば、左の如し。

千八百六十七年 八百萬人。

千八百七十八年 一千二百萬人。

千八百八十九年 二千五百萬人。

因により、わが東京上野に開きたる、第三回内國勸業博覽會開會中の縦覽人をあぐるどきは、二十三年四月一日より七月三十一日まで、開會百二十二日間の縦覽人數、

優待券 六千六百六十七人。

特別券 四萬二千二百六十九人。



通常券

九十四萬六千八百二人

學生

二萬六千七百九人

海外招待券

二百四十四人

合計、一百二萬三千六百九十一人

一日平均、八千三百九十五人

佛國博覽會の閉場の日、三十七萬人の入場ありしは、わが博覽會の入場者一日平均數八千三百餘人に比するときは、實に彼は四十四倍ほどの大數なり。且つ同會縱覽切符の發行高は、其數三萬枚にして、實價を以て賣りたる數は、二千八百萬枚なりしといふ。誰か其の大博覽會なるに驚かざらん。

世界第一の長髯

佛國の或る製鐵所(原書に地名を詳記せざりし)

の職工に、ルイ・グーロンと云へる者あり。本年六十二歳の老齡なるが同

人は、十二歳の少時より早く鬚、鬚、髯を、フサ／＼と生じ、十四歳の時には、鬚の長一尺に及べり。爾後年々歳々生長して、六十二歳の今日は、長は遂に九尺餘に至り、未だ其生長を止めず。グーロンは、常に之を首の周圍に巻き付ると、猶襟卷の如くすと雖ども、若し之を解て下に垂る時は、一たび之を地上に達せしめたる上更に折返して手に携ふるも、尙は餘りて長く垂れ下る由。

世界第一の過激家

世の中には珍らしき人もあるものなり。此厄

介ものは、現今國會議員なるが、名をフリッツ・スピアといひ、本年八十八歳なり。千八百四十九年より同七十年までに、出したる罰金の總高は、廿一萬二千法(わが金貨四萬二千四百圓ほど)追放を受けたること一度、禁錮に處せられしこと廿九年五月、監視五年、人權を剥ぎ奪られしこと十年なり。

世界第一の工場。現今世界第一の工業會社と稱すべきは、スルツ  
 ノオ會社にして、實に佛國の中央にあり。カナールデニ、サントルに發す  
 る鐵道線路に曲り續きて、ブウルゴウニ并にブウルボチーの線路に接  
 續し、ロアール及びローヌに達すると甚だ容易にして、且つ速かなりと。  
 是れ、一は地の利を得て起りたる由にて、現今同工場内には、鐵鑛山、石炭  
 坑、鍛冶工場、鑄物工場、鋼鐵製煉所、器械製造所、有名なる高臺釜組立工場  
 試験場、鐵道線路、學校等ありて、その他、牧地、森林等の面積を合せて、總面  
 積千百クター即ち六里餘の平方なり。現今該會社に従事する役員職工  
 等の人員は、一萬五千六百人にして、其の出勤退出は、皆瀛車を用ひ居れ  
 り。

世界第一の懸賞金。ナポレオン一世が、紡績器械の精巧なる物を  
 求めんが爲め、百萬法(凡そ日本の金二十萬圓)の賞金を懸けたると、其後

英國議院が、大洋の深を取調べんが爲め、二萬磅(我金十萬圓)の賞金を懸  
 けたるとは、世人の常に懸賞の特例として引證する所なれども、古より  
 世界第一の多額の賞を懸けたるは、千七百八十年(ナポレオンの懸賞よ  
 り凡三十年前)佛國政府が、西印度マルナンキエー島(砂糖の産地にして、  
 當時佛國の一大富源となせる屬地なり)の蟻を驅除せんが爲め、金二百  
 萬法(我金四十萬圓は)の賞を懸け、其方法を天下に求めたると是なり。  
 然れども、土民の驅除法と、二百萬法の名法も、少も其の効なく、蟻は全島  
 に廣まり、甘蔗の根を噛み之を枯せしが、其後二三年を経て、一朝烈しき  
 旋風起り、數日間全島に荒れしが、不思議にも、風の靜まる後は、蟻虫の影  
 だも無く、且つ其の後、同島には絶て蟻を生ずるとなしと。  
 右の通りに、三町近くの高塔、一丈の長鬚、六里四方の工場と來てから、  
 流石の散史も、井の中から大海に出た蛙の様な心持で見物しましたか、

日暮方ホテルへ歸ると、先程美術會での演説を印刷した冊子數部を同會から贈り届けて置かれたので、嬢や其の他の親友へも、明白出發の手紙を添へて送り、昨夜の取返しに、今晚は少々早く寐床に入りましたから、あとは拙者も分り兼ねます。

## 第六日。

亞非利加洲のモロッコと歐羅巴洲西班牙との間は、地中海が非常にくびれて居て、其の西班牙の最も南端なる海岸にある、英國領百六十五年前より、英國に屬す。のジブラルター砲臺は、世界第一壯觀なる城砦にして、其の長さは殆ど三哩、幅四分の三哩で、岩石許りの半嶋の上にあります。其の中央の岩石は、海面上百四十四丈許の高さに屈き、其四面は屏風を立てたやうに切立った、岩石でございまして、此の嶋の足元と海水の間にある、狭い平垣の地に砲臺を築き、常々は、七千人の守兵を置いて守つて居ますから

どんな堅固な軍艦でも、理不盡に通る様なとは出来ず、實に、一夫之守れば萬卒過ぐるを得ずといふ要害の地であります。處が、散史は、六日目に早く佛國を出立し、此の城砦と見物する積りで例の通り、ワリワリ其の上をやって來ると、番兵がすぐに見咎め、他國の間者とか何とかいふて生捕られ、酷く辛い目に逢ひましたが、よく〜事情を話して、所持品をスツバリ檢めさせ、十二時頃に、やと赦され、此んな危険の所に長坐は無用と、サッサと飛び出しました。

東大陸諸國の見物は、ジブラルターで、スツカリ仕舞ましたから、西大陸へ渡るののでございしますが、此の間には、茫漠たる大西洋があるから、中々容易には越せません。散史の日記を見ると、何でも此の大西洋の上を通るときに、非常な強風に逢つて、幾千里といふほど吹き飛ばされ、無人の小嶋へ遣られたとは知れませんが、何處に吹き付けられて、何んな事を爲た

か、書てありませんから、其の漂流物語はお預りと致し、其の翌日午後六時頃、北亞米利加洲の北部に着た事からお話致します。そうすると、六日目七日目の事柄の至つて少ない事は、御承知を願ひます。

## 第七日。

明れば一月八日、散史の旅では第七日目となりましたが、昨日も申上る通り、散史は大西洋上で吹き飛ばされ、風船の中へ用意して来た小道具類も、時計等の外は、大抵此の時なくしました。六日目の正午から、本日の夕方までは、非常の苦勞をして、筆執るとも、忌やなため、其の實況を委しく書かなかつたのは、拙者始め諸君にも、残念なとでございませぬ。

散史は疲れ果て、可愛さうに、羽拔鳥の様な容子をしながら、漸く北亞米利加洲の北部に着きました。此處は合衆國と英吉利領アメリカの境の邊の、セントローレンスといふ大河のある所でして、此の河の水

上には、世界第一の瀑布(名はナイヤガラ)があるから、往つて之を觀ました。が、開たに優る大瀑布でございまして、二つになつて居ります。一は廣百八十八丈高十五丈八尺、一は廣六十丈高十六丈八尺で、一時間に流れる水量は一億噸あるさうでございませぬ。一噸は我が二百七十二貫四百目なり。高の點から許り申せば、是より高い瀑布は幾らもありませんが、全体からいふときは、是に越すものはありません。此の直ぐ下流に、長三十七丈の大鐵橋がありまして、上層は汽車道、下層は人道になつて居ります。こんな大瀑布でありますから、銀河が天から落ちたとか、百匹の白布を晒した様だとか位の形容詞では、まだ此の眞景を言ひ盡すとは出来ませぬ。我が國で鼻を高くしてゐる、紀州那智の瀧(高七十五丈)なほでも、其の水量から言ふたなら、失敬ながら、横鼻禰擔ぎになるとも出来ないでせう。明治十六年の九月中でしたが、英國に、危険いとを冒して、名を揚げた、大尉ウニツ

プといふ人がありまして、此の瀑布を泳ぎ渡る賭をなし、突き流されて  
 岩石に打ち付られ、身体はメチャク〜になつて死に、一時大評判となつたと  
 があります。此の瀑布を過ぎて、上へ浜ると、廣々と三個續いてる湖水が  
 ありますが、其の一番西北のシペリオル湖は、海面上六十三丈五尺に在  
 りまして、長サ四百哩、最大なる廣サ六十哩、面積三萬二千哩、浅い所二百尺、  
 深い所四百尋、世界第一の淡水湖であります。散史は便船に乗り込んで、  
 此の湖水を渡り、湖邊のシカゴ府に一泊するとにして、其の晩に、イラノ  
 イ、クラブ會社にある、世界第一の大机を觀に往きました。机は元來小さ  
 い物許り多い世界ですから、其の中の第一になるのは易事ですが、成程  
 我國の三尺机とは違ひまして、長一丈五尺、幅六尺の一枚板で出來て居  
 ます。此の用材の産所を聞きますに、世界第一樹木の繁茂してゐるカリホ  
 ルニヤ州から伐り出したさうです。今日は、面白くないお話許りで恐れ

入りましたが、其代り、明日埋合せに致しますから、此でお解散に願ひま  
 せう。

第八日。

散史の旅も僅か二三日しか残りませんから、萬事手廻しをして、今朝は  
 シカゴ府を立ち去り、東を指して、ヘンシルバナヤ州アルストル府の者  
 が所持してゐる、世界第一古い林檎を見ました。が、廣い世界には、色々の好  
 事家があるもんでして、此の林檎は、百〇二年を過ぎた品といひ升けれ  
 ども、今も青々として、新しい者に些とも違ひません。是れは、千七百八十七  
 年の初夏、花落ちて、漸く實を結だ頃、枝の上から瓶を蓋せて、之を枝に結  
 び、熟した時に、莖を切つて、瓶をキツシリ閉ぢた物ださうです。

合衆國の東部海岸地方は、何處へ往つても、鐵道線が横たてに敷かつて  
 ので、至極都合がよく、烟州一服の間に、紐育府に着きました。が、數千の日

本人が、出迎ひに来て居ましたから、其の人々の案内で、眞直に當府とブルーションの間に架つて居る、世界第一の掛橋へ往きました。其の一番大なる桁の長は百八十九丈五尺、橋の全長五百九十八丈ありますから、英と佛の間の海に架ける橋の出来ない中は、此の橋に及ぶものはありません。支那海の一支流に架けた橋は、二里三町あつて、世界第一の長橋だといふ人ありますけれども、此の支那の長橋は、場所も判然しないのですから、確とした證にはなりません。當府は、人口百二十五萬あつて、世界の大都府中第五番に位します。日本の商店、學生等も、數多見えます。此人々に、此州の豪商ハンダービルト氏の話しを聞きました。地球上に、十二億の人間ありますけれども、其の中一番の大金持は、即ち此人でございます。其財産のべ高は、二億七千四百萬弗あります。もし此金額を積立てると、廿五年の後には、十億弗の高になります。又此金高を、一弗の流通紙幣に直

して、其の端を段々つぎ伸ばせば、三萬一千三百二十マイルの長さになり、即ち地球の一番長い所の周圍を、一周りしても、尙其の四分の一に届く長さになります。大した金持もあるヒヤありませんか。此人は、もとは貧しい人でしたが、今では、金の無い苦みといふは、どんなことか知りません。どうかして、一度貧乏になつて見たいなんつて、顔回が二合徳利をさげて、酒買にゆく体、小野小町が、豆腐買にゆく体などを、頼やかけものにかざっておきますが、私しなどが、こんな人の子でもあつたら、朝から晩まで、お札の勘定ばかりして居りませう。當てもない夢のやうな話しは、あどにして、散史は先を忙ぐので、精しい見物もせず、市中を素通りして、僅か南にあるヒラデルヒヤ府に往きました。

此の府のフェアヤモン公園は、世界第一愉快なる土地といふ評判のある地です。残る隈なく見物しましたが、まだ日も高いので、當府

の大力持シヨイシの宅を尋ねました、此の力持は、シヨイシ、ソットマンといふ人で、世界第一の強力といふ許りでなく、世界始つてからの強力といふべき者で、七十二斤の偃月刀を振り廻した關壽亭其處のけ、千斤の鼎を扛げた孟賁降参しると云ひさうな形相は、六尺四寸の身の丈、四尺五寸餘の胸の周圍、三十三貫七百六十目の体量あるので、一寸見ても誰にも知れます。散史の入つて來たのを見て、

シ「是は、よく、よろこそ御尋下され候。先々此方へ。」

と坐に請じ、暫く問答の末、散史は、怪力の委細をたづねますと、

シ「申上ると仔細なき事なれども、貴國には、馬鹿力といふ諺ありて、大力者は、馬鹿の部へ編入せらるゝに候はずや。何とて、我が馬鹿を東洋まで廣むるに及ぶべき。」

散「是は以ての外の御言葉。いかで彼様なることを申し候べき。我國人が、御身の噂を聞き知りて後は、シヨイシ會なる組合を設け、朝夕力を練り、御身の聲に倣はまく欲する輩多ければ、是非共平生の御模様を承りたし。」

と譽め立てると、シヨイシは飛び立つ許りに喜びました。が、早速座右の文庫から、自分の事をよく書いた繪入新聞一枚を出して見せました。此の同じい新聞許り、百枚餘ある様に見えましたから、自慢半分に逢ふ人毎に、一枚づゝ呉れるのでせう。其新聞に、

有名なる力士シヨイシ、ソットマン氏は、此頃近所の体操場に行きて、其の力量を諸人に示さんがため、重サ百斤のダンベルを、二本の指先にて振り廻すに、恰も枯れたる竹杖を使ふに異ならず。左れば、其の場に居合せたる生徒等も、其の力に驚きしに、シヨイシは得意氣に鼻動めかし、自ら枯木の如き腕を十分兩方へ張り、誰にても、望の者は前後左右處



嫌はず、我身体に取絶るべし。と叫びしかば、十餘人の生徒等は、生たる器械にて体操するとの面白しとや思ひけん、聲に應じて立かゝり、兩の手足は勿論、首筋腰の周り、杯、少年の無遠慮に、或は攫み付き、ブラ下り、賽の河原の地藏も宜敷といふ有様なるに、シヨ―シは一向平氣にて、何の苦もなく立あがり、自由に歩行したり。されど、尙飽さ足らずと、思ひ直に力量試験器の前に進み、二千斤の重量を、最と輕々と引上げ、其の後、丈夫なる繩を、背後より兩の肩にかけ、其の兩端に、二千三百斤の鐵塊を結び付けしにぞ、有合ふ人々は、呆氣に取られ、口々に、無用々々、如何に御身が力量あればとて、何とて其を扛ぐべき。あたらず脈を絶ち、鳥獲や孟賁に笑はれ玉ふな。(マサカ)といふ中に、シヨ―シは全身の力を兩の肩に込め、ウンと一息叫ぶや否、宛然二王の形相にて、ツルと動き、其の儘書院の中を歩きたり。左れば、シヨ―シは、希西人の



奉信する荒神ヘルキユールスにもおさく劣らぬ實に古今無雙の  
 恠力とこそいふべけれ。

とあります。此の夜は、シヨ一ッが強ての勸めでございますから、散史は  
 一泊するととして、夜更けまで、色々の力藝をやらして見ましたが、其の  
 強力は驚愕すると許りで、丸で鐵作りの身体ときり外には見えません。  
 ですから、散史はほらを吹く事も出来ず、呆れ果て、譽め様もなく、二王  
 様と同宿した様な心持で、今夜を送りましたから、例の通りお暇申しま  
 す。

## 第九日。

廣い世界を旅行すると、中々奇しい物を見聞するのは、當り前ですから、  
 悠閑と膝栗毛を仕たいのですけれど、元十日間で仕舞はなければな  
 らないのでございますから、不本意ながら、逗留などは成る丈け仕な

い様にして居ます。さて、今日はシヨ一ッの宅を立て南方を指し、ワシン  
 トン府を過ぎ、世界第一の洞穴を尋ねる見込で、ツンツン進んでる中、午  
 前九時頃ならんか、遙か後の方から、

『研堂散史待たれよかし。敵に背を見せるは卑怯なり。』

と、源平時代の軍物語にでも有りさうな口上で、呼びかける聲がするか  
 ら、此の天空で、我の名を呼ぶ者あるは不審と、振り返して見ると、ソリヤ  
 どうも氣味の悪い事は、眞四角眞黒の身体で、處々に金色の横文字らし  
 い模様がかか／＼する大入道が、風船に乗って追かけて来たのでござい  
 ます。恐い物見たさといふともあるから、逃げ隠れもせず、  
 驚我こそは、大日本帝國の研堂散史に相違なし。シテ御身は如何なる者  
 ぞ。

『抑我は、故の合衆國大統領グランド將軍が、自ら筆とりて編まれたる』

同將軍の一代記なり。世界第一賣れたる本なりとて、全地球上に知らぬ者はなかるべし。然るに、御身は世界一周と觸れ出し乍ら、我を尋ね呉れざるは、甚だ以て合點往かぬ次第なり。若し此場にて、私の物語を、残らず聞き取らば、良し。左もなくば、潔よく決闘せん。

と、變的な申分ですけれども、何でも、奇しい事を聞かせるぞ云ふのは、えてに帆を揚げる次第ですから、甘く返事をしました。が、本は得たりと唇を濕し、

「然らば、御身は我が言を聞き玉へか有難し。委しきとは、一朝一夕に盡すべきにあらざれば、唯大略を陳述すべし。我を製造するに用ひしクロス(表紙の上を包み張るに用ひる、黒き光ある布の如きもの)の長は、一萬三千三百五十二丈。表紙に用ひし皮は、羊二萬七千八百九十二頭、山羊七千二百二十一頭、牝牛百三十八頭にて、標題に用ひし金

箔を、通用の貨幣に鑄直せば、百五十四萬四千六百四十弗を得べし。又我を販賣せしは、大概グラント將軍が手下の兵卒、及び家扶等九千人以上にて、此の人々に與へし給金は、百萬弗以上なり。古今各國、斯く盛んに製本したるは、未だ聞かざる所なり。御身、もし此の事を記さるれば、十日間世界一周(どうして此の名を知り居たるか甚だいぶかし)も數日にして數百萬部を賣り盡すこと、私の保證する所なり。

といひ終るか終らないに、一天俄に掻き曇ると見えましたが、光明なる紫雲たなびいて、ブツを取り巻き、飛ぶ様に速く虚空の中へ隠れて仕舞ましたから、散史も跡見送って茫然し、サ、今の事は夢か現か、夢にしては判然し過ぎてゐる。何れ此處で考へて居ては、身体が墮落して仕舞ふから、國へ歸つて緩く考へようと思案を定めて羽ばたき始め、洞穴の探究に向ひました。

ケンタッキー州エトモンワンカリンチーのマンモス洞は、世界第一の  
 洞穴でございますから、これを尋ねました。此洞穴は、グリーン河の近傍  
 ケイブ府へは六哩、ボーリン、グリーンへは二十八哩の所にありまして、  
 高低不揃の岩窟が長く續いて出来たのでございます。此の洞穴の中は、  
 太陽の光りに當るとなく、暗黒ですから、此の中に生活してゐる魚鱈など  
 は、物を見ることがないので、眼は不用でございます。ですから、皆盲目魚に  
 なつて居ます。散史は、早速洞穴の中や、盲目魚などを見て、直ぐ是も同州の  
 ハンソン・クレグてふ、世界第一の大男の家に往きました。此の男は、本  
 年三十二歳で、目方が九十五貫目餘、身の丈六尺四寸ありまして、其身体  
 に丁度する服を作るには、三十七ヤード（我が十一丈一尺餘）なければ間  
 に合はないさうです。其の幼少の時の事を聞くに、誕生の時、已に一貫三  
 百二十目の体重あつたさうで、二歳の時に、ニューヨーク府小供見世物に出

て一千弗の賞金を貰つた事あるが、其時ですら、二十四貫七百目餘の体重  
 あつたといひます。併し、此の男の父は十三貫八百目、母は十四貫六百目餘  
 の体重じやたさうですから、其んなに大柄といふ程でもない両親です。  
 日本の角力取りには、随分大柄の人もあるようですが、一昨年（一九〇一）一月に、  
 帝國大學院で、角力年寄りに相談して、四百餘名の体重を量り升たとき、幕  
 の内二十八名は、平均二十三貫七百目程で、中には幕の外の梅谷許り、三  
 十貫目餘あつた位の者ですから、中々此の大男に及ぶとは出来ません。實  
 際散史の身体などは、七人散史の体重、十三貫四百目。丸つて往かないと。  
 敵せないのですから、世界第一の評判取るのも、無理ではございませぬ。  
 前々から、米國バルチモア府大博覽會に在つて誰にも縦覽を許し、大  
 ウィニーの號名を取つた、世界第一の肥婦ウィニー・ジョンソン女は、近頃どう  
 してるかと尋ねました所が、大男は憐れな顔付をして、

男實に仰の通り、世界第一の肥婦ありまして、何時も拙者と一對の話の種に致されて居りましたが、不幸にも、昨年九月三日、心臓肥満の爲めに死去されました。同女の大きいとは、實に例外で、拙者などは及びません。其体重日本の百〇二貫目餘ありますもの。

散既に死去と聞くからは、同女に面會すべき術もありません。左りとて、此の奇女の事をして、わたら隠滅さするも残念に堪えませんが、願くは、御身のお知りなされし丈の事をお聞きたうぞんじます。

男別に委しいとは存じませんが、貴意に任せ、一應述べ申しませう。同女は、五十年前、シリリ郡のキー地方に生れ、幼時は別に肥えた身体でもなく、十五歳の時、ヨソリンと云ふ人に嫁入し、一子を設けましたが、二十歳になつて、始めて身体の肥え太る萌しを顯はしました。それから、其の肥え太る度の速いと、自分も驚き、他人も怪しむ許りなので、醫

師も手を盡して、之を抑制やうと試みましたが、少しも其の甲斐なく、年々肥満の度益甚だしく、遂に十九年前には、同女の通行に差支へるので、自宅の門、戸、樞子などを廣く作り代へたとあります。死期に先だつ數日前から、同女は呼吸の切迫を覺ゆる由を告げましたので、直ちに醫師の療治を受けましたけれども、遂に回復しませんでした。同女の葬式を營むに方り、其の柩は、通常の者では間に合ひ兼ねるから、別に柩を大きく新調させました。柩は、長五尺六寸、廣三尺五寸、深三尺二寸ありまして、之を大きな車に載せ、數人にて引く趣向でございます。然るに、爰に大困難なのは、柩を穴に入る、一事でして、到底尋常の方法ではいけませんから、穴の一方を斜に掘り、デリック(物を揚げ卸する器械)を用ひて、遂に之を下しました。其の墓は、バルチモリア府中の、最大のもので、長一丈五尺、廣六尺あります。

と、至極懇なる説き明しに、散史も痛く満足し、丁寧に禮を述べて立分れ、合衆國の中にて、南部に位し、メキシコ灣に突き出でたる、フロリダ州に参りました。この州は、半島になつてをりまして、氣候は極々暖かいので、北部の米人は、一月から三月までの間、冬凌ぎのために、此處に来るものが澤山あります。丁度、東京人が、寒中伊豆の熱海へ遊ぶのと同じうございます。散史の仕合せには、米人の冬凌ぎは、どんなものかといふ、見物ができました。先づ、吾々始めとなたでも、旅行をする目的は、見慣れぬ國の山水風俗等を賞するにありますが、此米人のフロリダ旅行は、旅館の外へは、一歩も出さず、先づ朝起きると、間もなく朝飯を食べ、此所彼所に集つて、揺椅子に揺られ乍ら、二三時間をたゞ過し、晝飯になるのを待ち、食事やすむと、又揺椅子にゆられて晩食を待ち、晩食の後は、大勢一所に集つて、音樂を聞く位のとです。から、其目的は、全く旅館にありまして、人に向

て噂するにも、誰も其地の光景の賞美はいたさず、唯旅館の可否善惡を評する許りであります。それで、旅館の構へは、大きいければ大きいほど、米人の氣に入ります。が、小さい家では、どんなに清潔でも、取扱が丁寧でも、食物が甘くても、其賞讃はうけられません。ジャクソンヴィル及びセントオーガスチンには、六百人から一千人を容れられる、旅館の数が、二十戸もありません。が、一月の始めから三月の終までは、旅客が常に充滿してをります。米人は、自分の國の優れ者を、直に世界第一とする癖があります。が、セントオーガスチンのポンス、デレオンホテルばかりは、誰が見ても世界第一の旅館であります。散史は、投宿すると直に、鉛筆を甜りながら、彼處此處をかけ廻り、給仕人(給仕人は皆黒奴なり)に、色々の質問をいたし、大抵書き取りました。此旅館の位置は、晝にも書きたいほど美しい小都會の、取分け最も美しい所にありまして、瑠璃の壁、橙子の林、墳水、堂

塔、會堂などの廣きが上に、美麗な結構は、人をしてアラビヤナイトの家を寫し出したらば、かやうであるかと思はしむる位でございます。こゝに群集して、冬凌ぎをする旅客、一人前の宿泊料は、酒類其他非常のものは別として、一日十弗以上廿五弗以下でありますから、妻子と共に三人で泊るものは、雜費を合せて、どうしても一日百弗以上二百弗は掛ります。随分高い宿料ではありませんか。しかし、米人は、一向平氣で喜んでをります。散史は、投宿しては見たもの、僅か十錢の旅費で、漫遊する旅です。から、十弗二十弗の宿料は出せません。そこで『宿料は持たないが、どういたさうと、亭主に掛合つた所が』『どういたさうといはれたって、こちでは、尙どういたしやうもありません。早速お立下さい。』といはれて、モッケの幸と出立しましたが、旅館へ素見とは、餘りはめたお咄しでもありません。散史は、世界第一の旅館から放逐され、西南に花を取って、飛行を始めま

したが、間もなく、世界第一の大河、ミシシピ―河(長千六百四十哩)を渡り、ルイシアナ州に於て、同州南端の、或る會社が支配してゐる、世界第一の耕地に着きました。兼て、米國には、廣い耕地の有ると聞いて居ましたが、此んなに廣かるふとは思へませんでした。先づ、坪數が六十萬九千四百四十四町一反二畝五步、即ち十九里廿八町四方餘ありますから、餘處では、とても見られませんが、同耕地は、元は牧場でしたが、今は數區に分けて、耕地と爲て居きます。之を耕すに、牛馬は一疋も使はず、残らず蒸氣を用ひますが、例へば、大幅を一畝として、此の畝の兩端に、機關各一臺、この機關は、進めるも止めるも、運動自在なり。を仕掛け、此の機關で、耒耜四個を結び付けた、一筋の索を動かす様な仕掛ですから、僅か三人で、一日に十二町一反五畝歩程を耕やされるさうで、種蒔其他の事、何に限らず、皆此の仕掛で行つてをり、仕事も大そうはか取ります。此の耕地内には、牛馬

一萬六千頭、小蒸氣船三艘、鐵道線三十六哩、其の他、氷室、造船所、水車場、各一個を持つて居ますから、大百姓ども、小百姓ども、言ひ様はありませぬ。此農業にくらべて見ると、日本の農民が、蟻の埒ほどの田畑を、自力で耕してをるのは、ほんに骨折損のくたびれ儲けの仕事と、思はれます。機械の力で、仕事をやらせなければ、收穫物が、どうしても、高價になります。其上一人で、何十町歩も耕作する事ができません。

散史が、此の耕地を見て、仕舞った時は、日も暮れましたから、此の邊に宿泊しても良いのですが、明日は、中部アメリカから、メキシコの邊を見て、歸國しなければならぬので、先を非常に忙いで、瀛車に乗込み、南方へ進み、今夜は、車聲轟々の中に、假寐して過ぎましたから、第九日はつきました。

## 第十日。

今日こそは、本國へ歸つて、花のお江戸の人になられる意氣込みですから、心も勇み、氣もはづみ、嬉しくつて、四時頃から目を覺し、待つてる中に、夜も明け、メキシコ州に着きましたから、早速車を下り、同州ビューベラの西南、三十五哩にある、世界第一高くして最も壯烈なる噴火山へ登りました。武者修行の山賊退治を氣取つて、嶮岨の場所を尋ねて廻る散史です。から、別に恐い者もありませんが、此の噴火峰の高さは、海面上千七百七十八丈四尺程あるので、随分難義をしました。其の頂上に登つて見ると、噴火口の周圍三哩、深さ百丈あって、天も焦る許りに煙を吐いて居ますから、此の噴火口へ這入つたなら、佛法でいふ焦熱地獄へ、直ぐ往かれますのでせうが、散史も生命は惜しかつたもんと見えて、此處で地獄見物を始めると、日本へ復命する者がなくなるなんて、遁辭で胡麻化し、其の口へは這入らず、道を中央アメリカに枉げて、世界第一の最小國ニカラグアに往きま

した。世界中で、最小の國といへば、布哇國に定つてゐるやうに、世間の人は思つてゐるのですが、此の國は、又更に小さくあります。米國中、王と稱へてゐるのは、唯此のニカラグア王許りですが、此の王の支配してゐる人民は、ニカラグア湖の北岸に棲息する、モスクイトー、インディアンといふ、僅か二三百の黒蠻族、丈けでございます。此の國は、最初は英國の保護國でしたが、今は獨立國と爲つて居ます。世には、英國のやうに、太陽の照さぬ時なき迄に、諸方に屬地を有つてゐる大國あるかと思へば、又斯んな小國もあるから、大きいにも小さいにも、際限はありません。

南亞米利加洲のブイノスアイルスから、アンデス山の麓に往く、新ア  
ーシエン太平洋鐵道は、世界第一の直線にして、此の線路は、些どの折れ  
曲りもなく、二百十一哩の遠きに達し、其の間は、一ツの橋もなく、三尺より  
深い溝、三尺より高い丘もなく、其の西の端の原野は、茫々として一本の

樹木も見えぬ程の名所ですが、此處へ寄ると、餘程の廻り路となるもんで、すから、「ナ」に己等の國にも、三嶋様の拵へて呉れた道路には、随分見通しの届かない直線があるから、態々見る程の事も無い」といふ獨り判斷で、其の直線を見るときは、廢止にして、直ぐ西北のカリホルニヤ州へ引返しました。其のために、世界第一金満家の美人であらうといふ世評のある、ドンナ、イシドラカシノといふ婦人を、尋ねるともいたしません。此の人は、南アメリカ智利共和國ウアルパライソといふ、邊鄙な所にすんでをり、早く良人に死に別れ、只今は寡にくらして居りますが、家には四千萬弗の財産を持ち、其容貌の美しいと、多くは例のない人じやと聞きました。しかし、此の仕合の身でさへ、尙いくらかの不仕合と免れません。なせといふに、南亞米利加のやうな邊鄙に住居しますから、其の名は、世間の人に少しも聞えませぬ。況して、文明の中心となつてをる、歐洲に來や



うと、するには、數千里の船路を渡らばならず、ロンドンで號砲を聞て、  
 パリスの芝居に其夜を送るなどの事は、夢にも見ることができません。  
 此のカリホルニヤ國は、黄金の産するとも、世界第一位になつて居ます  
 が、大きい樹木の繁茂してゐるとは、世界第一の國でございます。現今世界  
 第一の大木は、此の州のマンモス樹ですが、同州の地質學協會員の測量  
 した處で見ると、高二十七丈六尺、根底の周圍十丈八尺、地上一丈二尺の  
 處で、七丈六尺の周圍あります。又或る樹は、高三十七丈六尺、幹の直径三  
 丈四尺のものもあります。先年伐り離した樹の中、最も大きい者の年齢  
 は、二千年から二千五百年の者が、幾らもあつたさうです。

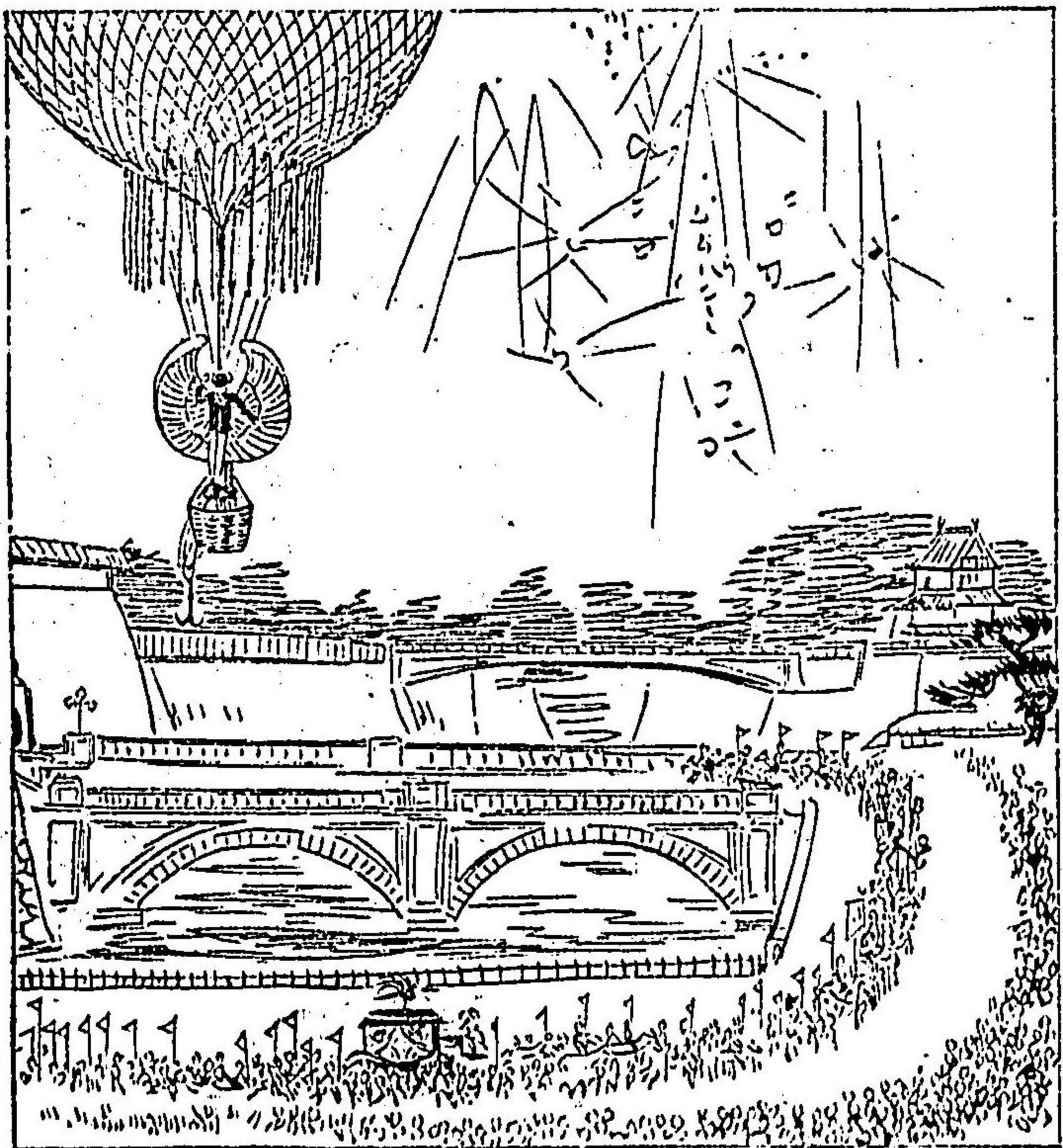
これで、散史は思ふ丈の見物は濟みましたので、一時も早く歸國した  
 いのですが、折角來た序でに、サンフランシスコを見ないのも残念です  
 から、一寸立寄りました。此港は、日本と最も貿易の盛んな地で、日本人も

大層居りますし、日本の商店なんども、所々にありますから、日本に着い  
 た様な心持が起きて溜りません。けれども、此の西の海一ツさへ越せば、眞  
 の日本じやから、速く歸つて道中の話を友人達に告げたいといふ一心で、  
 早速羽ばたきを始めましたが、名も太平洋といふ通り、思ひの外安穩に  
 打ち過ぎて、正午前十時日本に着きました。さて、地球といふは手紙  
 のやうな物とは、兼て聞てあつたがほんに、日本から出立して、西の方へ許  
 り目指して往くと、矢張もどの日本にかへるとができる。地理書は我を  
 欺かないと、自ら心によるこびながら、胸算をして見ると、今日で丁度出  
 入十日なれども、満九日と五時間で一周して終つたから、十日翁からの賞  
 金十萬圓は、何に使ひようと、心配を爲す乍ら、先づ東京の眞中へ落る積り  
 で、些と見廻はしますと、不思議にも、東京市中は地面の見ぬまで  
 人出多く、數萬の老幼男女は押し合ひせり合ひ、四方八方から馳せ集り

本氣の沙汰とは思はれぬ騒きでございます。ハ、ア、是れは我の今日歸朝するため、皆出迎ひするならん。」と考へました。が能く見ると、禮服を着た軍隊も居並んでる様子、花火なども揚つてるから、不審は益々晴れませんが、自惚根性で、『十日間一周の功を賞して、特別に、陸軍大臣から達して、軍人に迄出迎ひさせたのかも知らん。』など、首領て、段々下つて見ると、イヤどうも、無禮とも失敬とも、申し様のない間違ひで、今日は千代田の新皇居へ、聖上の御移轉遊ばさる、目出度御式のあらせらるゝ當日で、今十一時は、其の御通輦の最中でありますから、お模様拜見の爲めに、都民の群り集れる譯も分りました。が唯一、散史の身に心配になつて來たのは、中天に居て、龍駕を下界に見た科で、捕はれもしちや大變、此の御式が濟んでから下るふかど、ブル〜震ひ込んで、うるついで居ました。其中、花火は、相變らずドン〜揚つてるので、『生れて以來、花火を天上から見たと

はないゆゑ、一番之を上から眺めて呉れようと、火筒から鉛直線に上に當る所へ來て、觀て居ましたが、間もなくパツと火烟が見えます。と、ンと響きながら、玉は散史の直ぐ側を上げるので、コレ一ツ玉を生捕にして見ようと、手を伸べて之を取らうとする機會に、玉は一聲ドーンと破裂したかと思ふ間に、目が覺めました。が、冷汗はビッシヨリかいてる。例の机に寄り掛つてる、ランプの心は出過ぎて、ホヤが眞黒になつてる。讀み掛けた十日翁は開いて居ますから、散史は目を摩りながら、『己は眠つたか知ら。今迄の旅行は夢か知ら。今日は一月一日の筈じゃから、夢ならば、一月十一日の宮城御移轉の様が分る次第はない。ハテ不思議……』

散史は、四五日過ぎますと、右の事柄を漏れなく明細に認めて、哲學會などへ質問して、夢か夢でないかの辯解を求めましたが、中々分らないので、別に、散史の尋ねて廻つたと思ふ五十餘所へは、皆銘々に、本月幾日頃、



大蝙蝠の様な仕度の研堂  
 散史といふ者が、實際尋ね  
 て往ったか往かないかを問  
 合せ、又電報で支那政府へ  
 照會し、周時代の占夢官の  
 子孫の存否を問ひ合せ、又  
 フランスの官立夢見協會へ質  
 問しました、各學士間の  
 意見が差って、同國の一大問  
 題となり、中々二三年には  
 方付きさうでないといふ  
 とでございます。

尙ほ、散史は、一周記の末に、『今回の周遊は、重もに大物許りを尋ねて巡  
 りしたため、古々しい事もあれども、續篇には、奇怪不思議の事許りを趣向  
 も文体も此の篇とは改めて出版すべし』と書いてありますから、續篇が  
 出たならば、其時又お話を申上ませう。十一日の間、下手の長談議を饒舌  
 て、諸君に迷惑を掛けた罪は相済みませんが、只今丈で大千秋樂とな  
 りましたから、何分御宥免を願ひ奉ります。

聽衆お花『十日間の中に、散史の乗って歩いた風船の始末のとは、少しもお話  
 がございませぬ。』

研『それは、予風船を空しうするなし時に變例なきにあらざといふとが  
 あるから、構ひないのでございます。』

十日間世界一周大尾

明治廿二年六月廿八日印  
同 年七月一日出 刷  
同 廿三年十二月十日印 版  
同 年十二月十五日再版出版 刷

定價金拾錢

版權所有

著者兼發行者

福嶋縣平民

石井民司

印刷者

三井駒治

東京日本橋區濱町  
二丁目十四番地

發行所

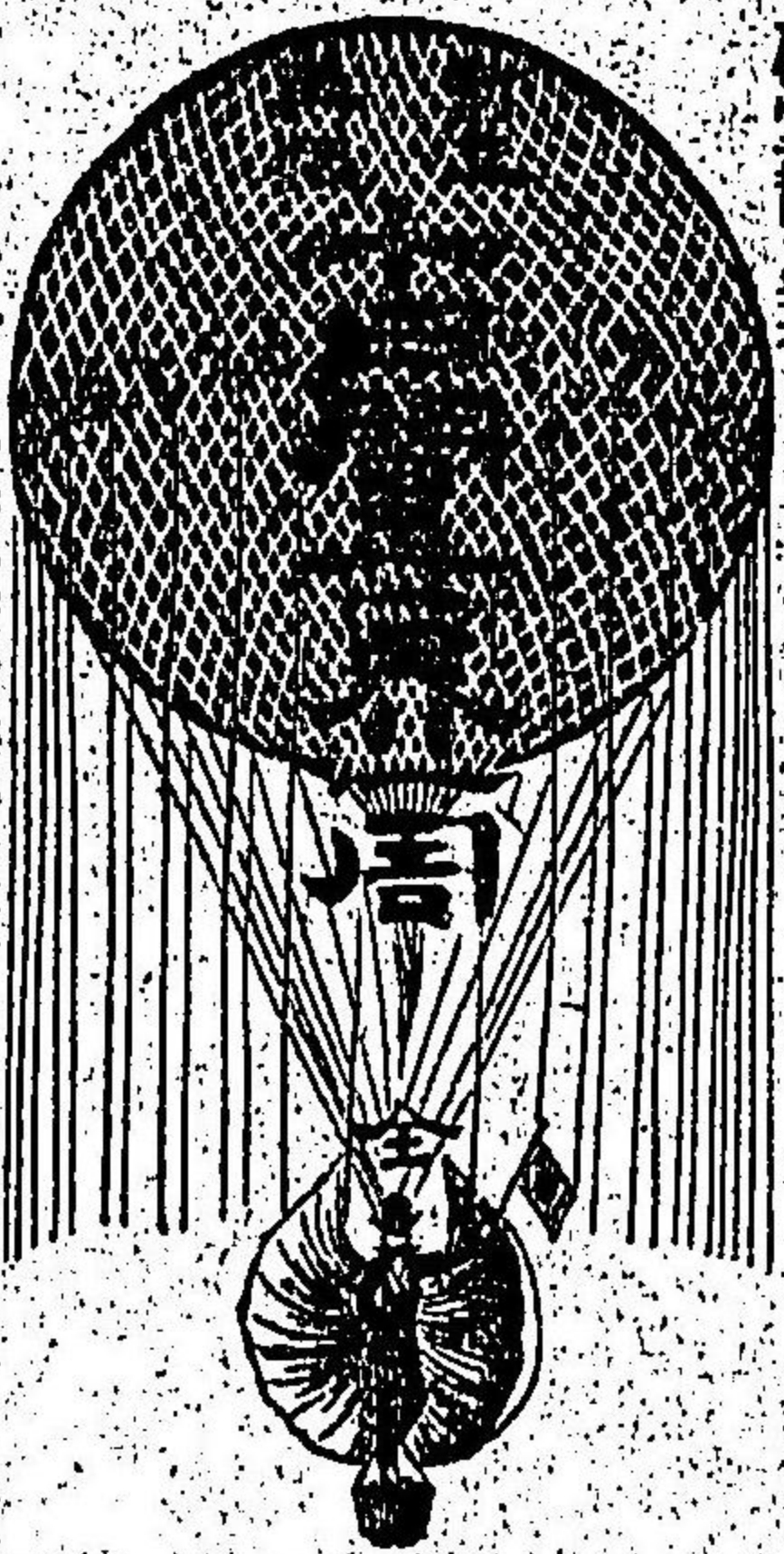
學齡館

東京神田區錦町  
一丁目十三番地

# 學齡館新版廣告

明治廿三年十一月下旬  
廣告

研堂散史著



全一冊○定價金十錢、郵税二錢○繪入。  
世界第一、大なるもの、珍らしきもの、小なるもの、舊きもの、等、一切を記したる、珍奇無雙の大博覽會にして、根もなき小説類と異り、地理博物の學を明らかに、博識の人の手からしむる、絶奇絶妙の新著なり。○初版は賣切れとなり、訂正増補して、再版出來す。  
研堂散史著



全一冊○定價金十五錢、郵税二錢○石版畫、及び木版密畫入。

本書は、我國二千五百年間の、武人百八人の言行中、最も著名のもの、みを輯めたる傳記にして、對句にて題を掲げ、たれば、記歴に便に、平易に述べたれば、雅にても分り易く、一士毎に著者の意見を附記したれば、忠節、姦良、智愚、勇怯の跡明かりなり。○附録には、日本男兒の氣質を鍛鍊すべき、勇壯活潑の古詩あり。  
研堂散史著



全一冊○定價金五錢、郵税二錢○美本製密畫入。  
小國民、第六號より第十三號まで、八回つゞけたる面白き動物學にして、各動物の、安樂に日を送り、弱肉強食を免るべき方法の會談なり。されば、其説く所平易なれども、其益少なからざる故、第一高等中學校、農科大學よりは、教科書に採用する命を辱ふせり。日本全國にて、これまで雑誌の記事が、官立學校の教科書となりたるは、實に本館の動物會を以て嚆矢とするなり。

# 幼年文範



全一冊○定價郵稅共金二十四錢○石版畫木版畫入。

後進者に、實用作文の方針を示すための著作にして、從來世にありふれたる作文書とは、全く其面目を異にする繪入作文書なり。假令は、洋行の人を送る序を教へずして、毎日の日記の記載方を示すが如し。○各題毎に、丁寧なる心得いまいじめ等を附記せり。



紙版五百頁○石版畫十七枚、  
木版百八十餘個入○全十冊、  
定價郵稅共金四十五錢○合  
本全一冊、定價郵稅共金四  
十五錢。

本書は、西洋の少年書類にたらし、快樂の中に、普通學の

霞城山人譯

# 學校遊戲全書

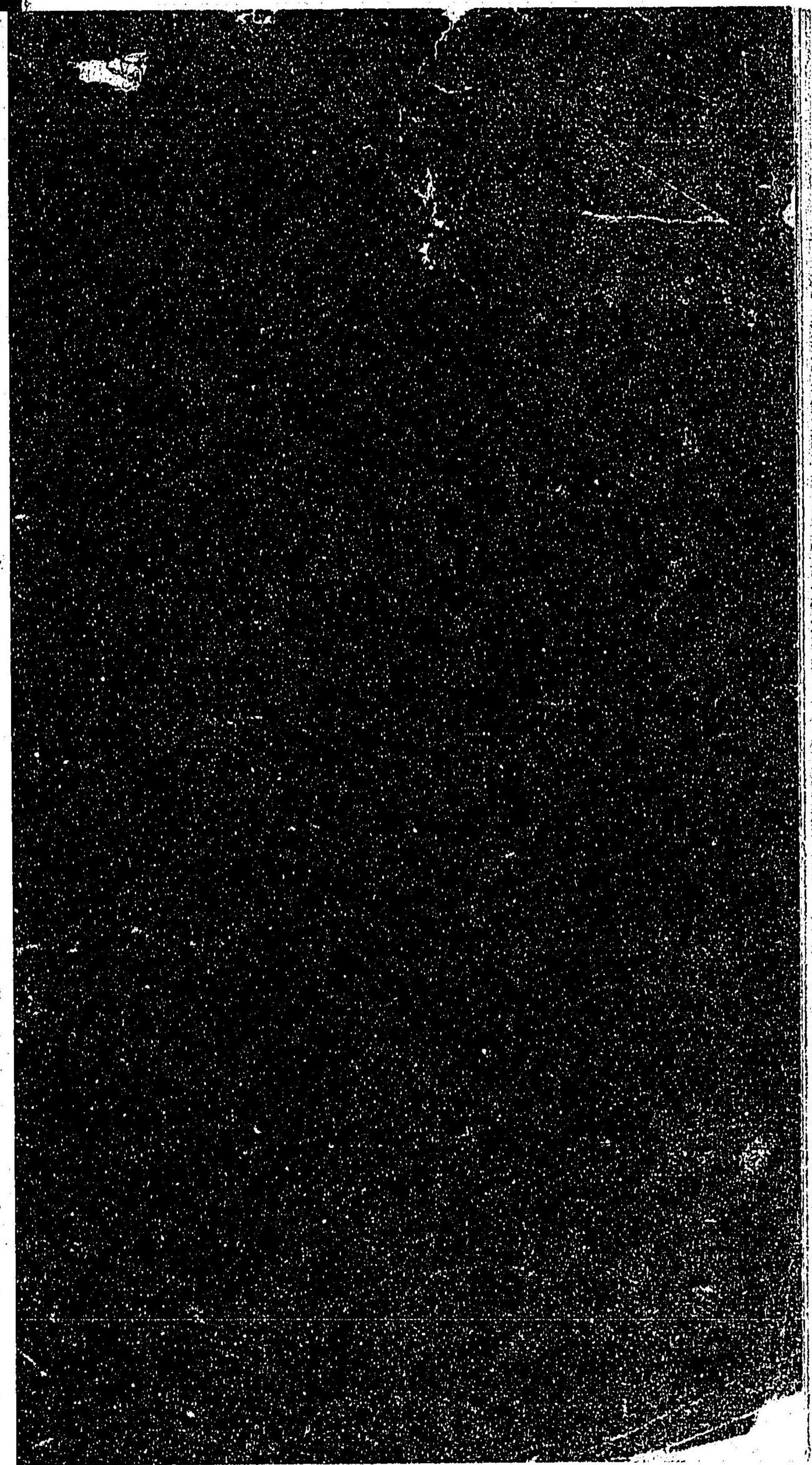
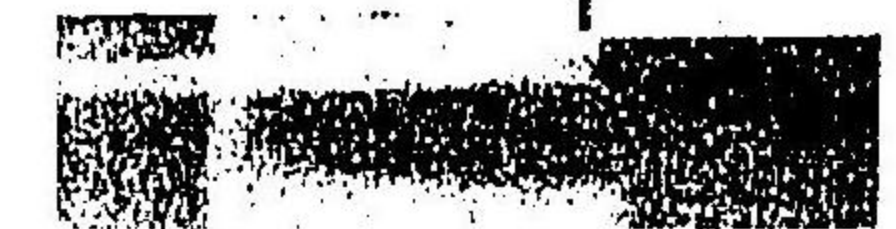
洋綴全クローヌ美本全一冊○定價郵稅共金八十五錢。

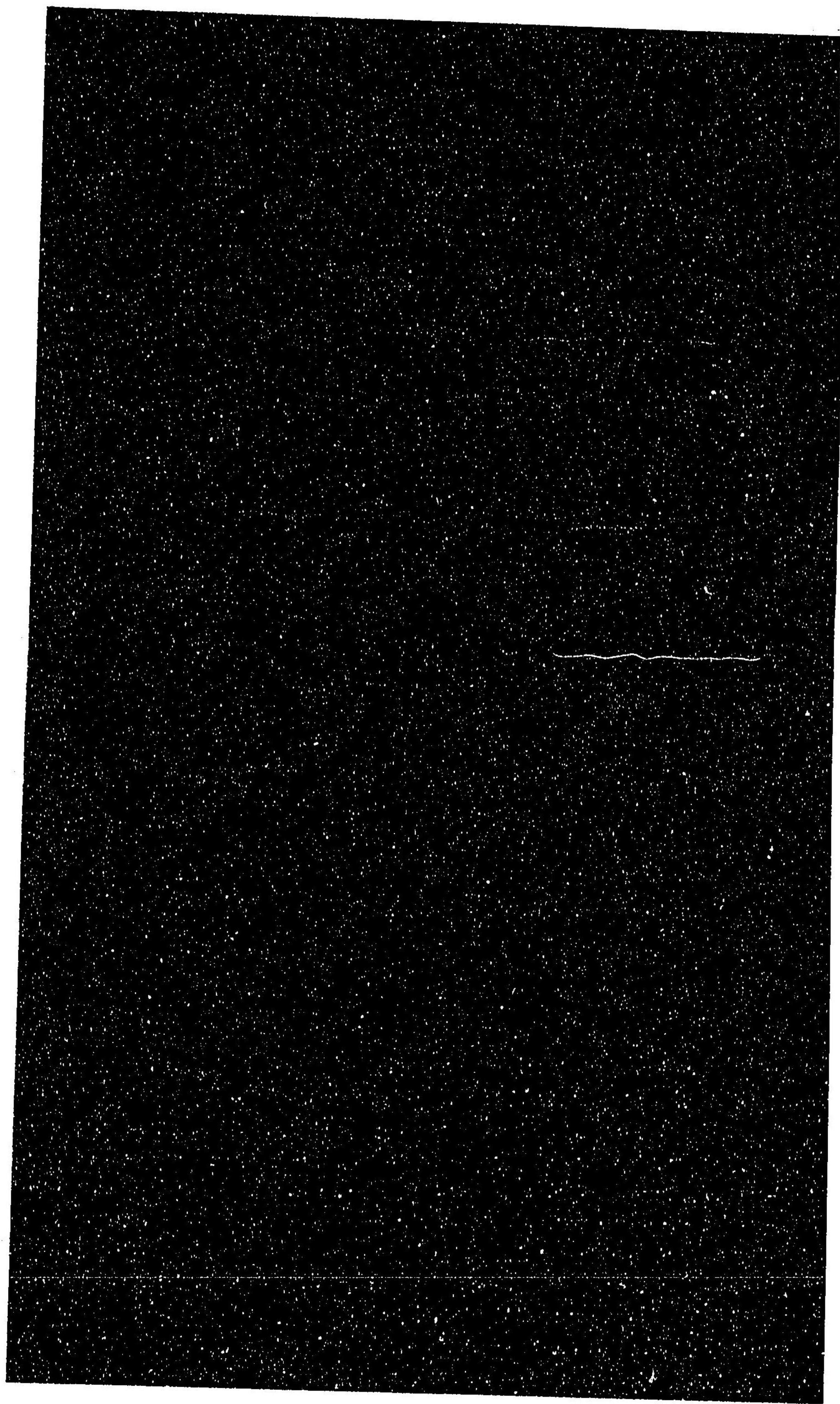
本邦未曾有の完全なる遊戲書にして、走戲、撲捉戲、暗射戲、跳躍戲、体操戲、運動戲、水浴、游泳、毬戲、丸戲、擲戲、棋戲、映射戲、空氣戲、水戲、重學戲、罰戲、算術戲、何戲、妖術滑稽戲、細工物等の數門に分ち、數百の新遊戯法を詳説したるものなり。○木版は、悉くツケの口木密刻版なり。

# 小國民

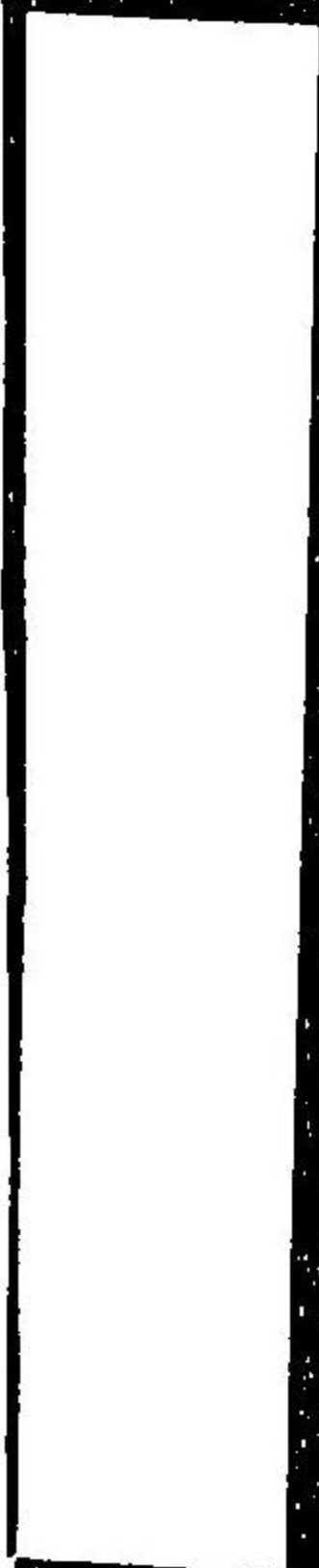
毎月二回發行○定價郵稅共、一冊金三錢五厘、十二冊三十八錢、二十四冊七十二錢○每號、石版畫二枚、木版十個以上挿入○十二月三日第二十四號發行

小學雜誌中、他に比類なき、親切、美麗、健康、博識なる雜誌にして、發行部數の、日本諸雜誌中、第二等に位するは、世の評す所なり。普通學を説くに、始終興味を失はざるは、本誌の特色なり。故に、快樂の間に、知らずく、百









特 20

289

十日間 世界一周

国立国会図書館

022192-000-2

特20-289

十日間世界一周

学齡館

M23

ADA-0621

